

# 「興味がない」で終わらせず ただ、ちょっと「知りたい」。 その先で導かれた選択



外にある機会



小説家  
浅倉秋成

大 学を卒業したら就職し、安定した仕事に就く——大多数の人が歩む道から外れる勇気が、僕にはありませんでした。子どものころの夢はお笑い芸人になること。小4からの友達とコンビを組み、高3で漫才のコンクールにも出場。しかし、友達が本気でお笑いの道に進む気持ちを固めていくのに反して、僕はそこまでの覚悟はもてなかった。彼と比較し、自分にルールから外れられるほどの才能があるのかと考えると、自信がありませんでした。彼は芸人の道に進み、のちにお笑いコンビ『レインボー』のジャンボたかおとして活躍することになります。

興味のあることを突き詰める性格でしたが、いつからか「自分が『興味がない』と思っていることは、単純に『知らない』だけなのでは」と考えるように。もしかしたら僕はまだ、ほとんど世界を知らないのかもしれない。とりあえず、さまざまな分野の入門編くらいには触れて“いっちょ



かみ”してやろうと、大学では幅広い分野の講義を取りました。そして大学3年生の時、たまたまシラバスで見つけたのが「文芸創作講座」でした。

講座では、学生が書いた小説を合評します。それまでほとんど小説を読んだことのない僕が見ても、文学科の学生が書く文章の流麗さは見事でした。知らなかった世界との、偶然の出会い。プロになる才能が自分にあるかなんて気にする余裕はなく、ただ、なんだか面白そうだという予感がした。そして「ここにいる講座生40人の中で誰よりも面白い小説を書きたい」と、小説を読み始め、自分でも書くようになったのです。

新人賞受賞の連絡をもらったのは、就職した会社での新人研修中でした。営業職として必死で働き、遅刻もせず、良い成績を残しました。忙しすぎて一文字も書けない生活を経て、会社を辞めたのが2年後。「作家として生きていける」という確信を得たからではなく、余白のない生活に限界を迎えたことでレールから外れた。そして今、作家生活12年を迎えました。

考えてみれば、今の高校生がいる環境は過酷です。ネットには、さまざまな分野で突出した存在がいる。簡単に比較できる環境では、自分の「好き」なんて大したことがないように思えることもある。「誰よりも好きで、才能がある」なんて自信は、そう簡単には得られません。それよりも、自分の知っている世界の外をただ見てみる。面白そうだ、自分はこの分野で伸びるかも、なんて直感を信じて、とりあえずやってみる。そんな“いっちょかみ”精神が、想像を超えた道につながることもあるんじゃないかな。

## Profile

あさくら・あきなり●1989年生まれ。千葉県出身。2012年に『ノワール・レヴナント』で第13回講談社BOX新人賞 Powersを受賞しデビュー。2021年に刊行された『六人の嘘つきな大学生』は累計65万部を突破し、2024年11月に実写映画化。『教室が、ひとりになるまで』『俺ではない炎上』『家族解散まで千キロメートル』など著書多数。

六人の嘘つきな大学生 (KADOKAWA)



外にある機会

小説家  
浅倉秋成

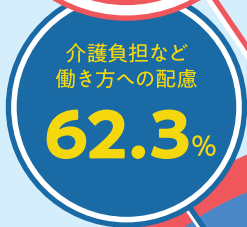




# 私を創っていく 機会と選択

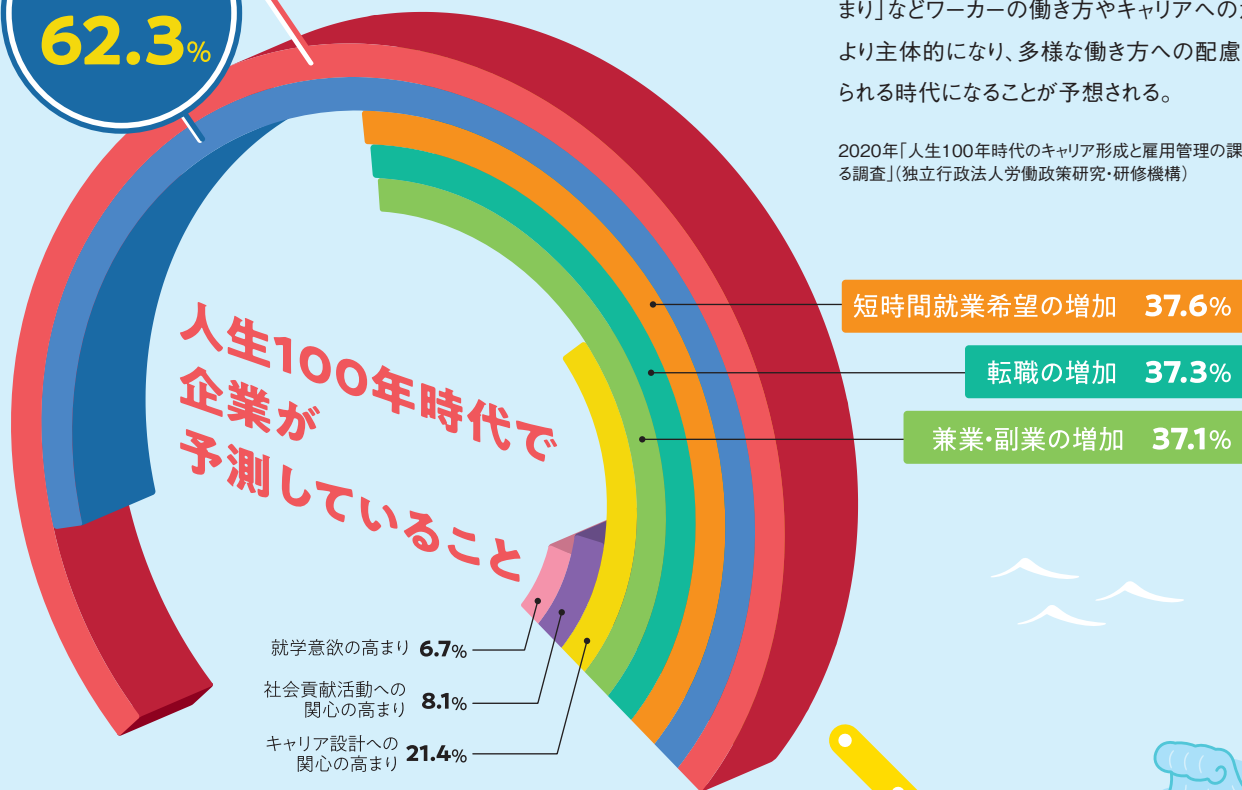
5年後、10年後の社会や求められる人材像が不明瞭ななか、  
どのような教育や進路指導を行えばよいか、悩まれている先生方も  
多いのではないのでしょうか。今回の特集では、「機会と選択」をキーワードに、  
これからのキャリア教育を考えていきます。

構成・文／笹原風花 イラスト／フクイヒロシ



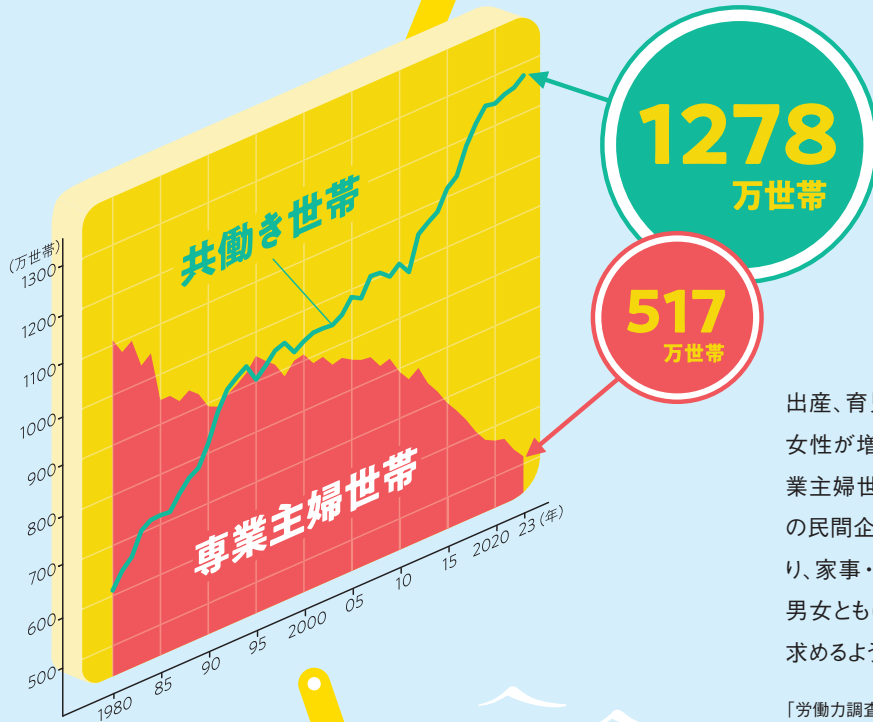
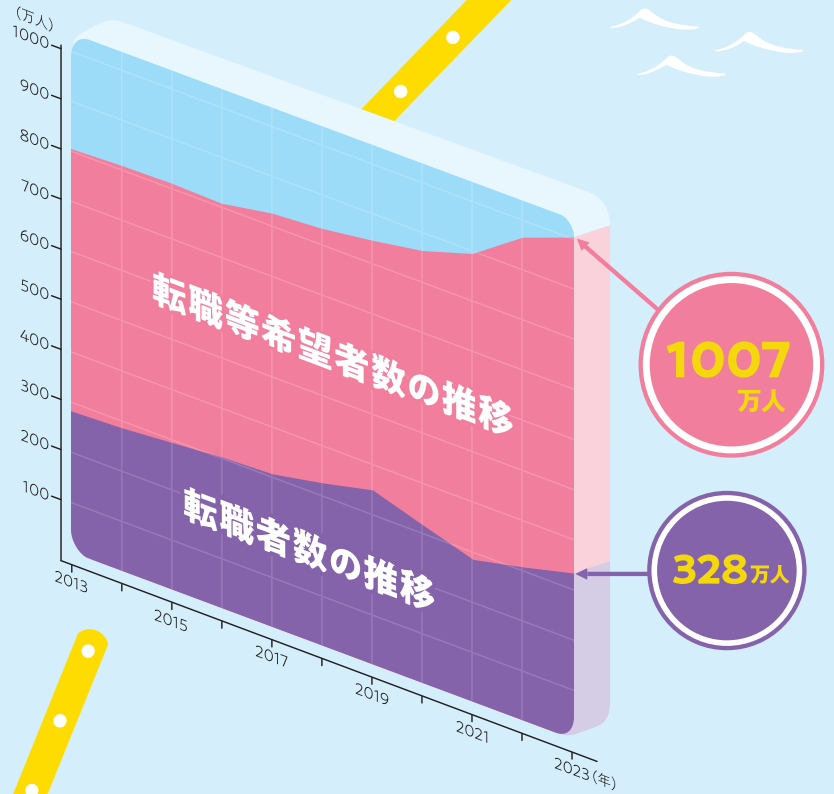
企業が「人生100年時代」で予測することのトップは、「勤続年数の長期化」。健康寿命の伸長などの理由から、今後は、歳を重ねても現役で働き続ける人が増えると考えられる。一方、「転職の増加」「兼業・副業の増加」「キャリア設計への関心の高まり」などワーカーの働き方やキャリアへの意識がより主体的になり、多様な働き方への配慮が求められる時代になることが予想される。

2020年「人生100年時代のキャリア形成と雇用管理の課題に関する調査」(独立行政法人労働政策研究・研修機構)



2023年の転職者は328万人(前年比25万人増)、転職等希望者数は1007万人(前年比39万人増)。いずれも増加傾向にあり、特に転職等希望者数の増加は近年著しい。若くして転職する人が増えるなか、終身雇用を前提としていた社内での人材育成のあり方などにも変化が見られる。また、「転職」へのイメージも、「キャリアアップ」というポジティブなものに変わってきている。

2023年「労働力調査(詳細集計)」(総務省統計局)



出産、育児などのライフイベントがあっても働き続ける女性が増え、共働き世帯数は増加。2023年には専業主婦世帯の2倍超になっている。また、2023年度の民間企業の男性の育休取得率は30.1%※にのぼり、家事・育児のジェンダー不平等は縮小しつつあり、男女ともにライフイベントに合わせた柔軟な働き方を求めるようになってきている。

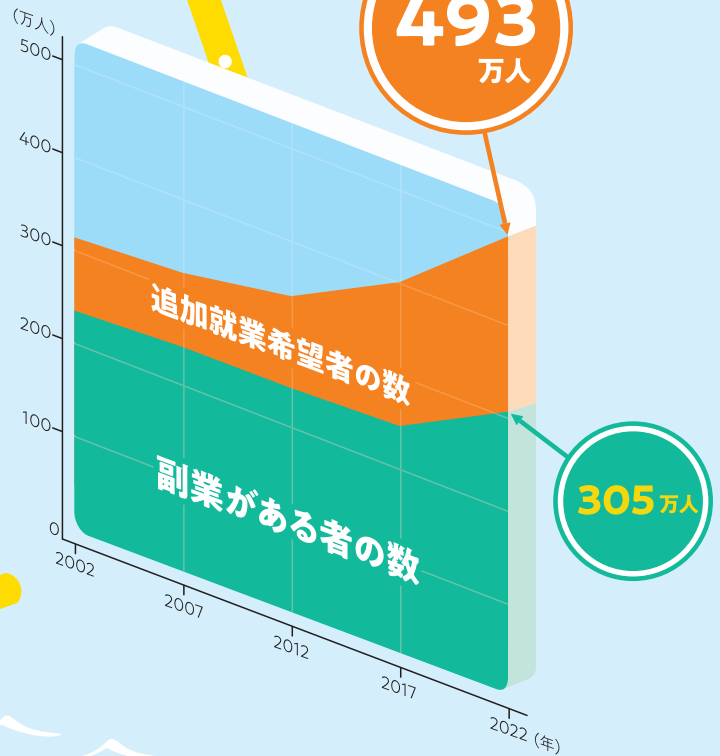
「労働力調査特別調査」、「労働力調査(詳細集計)」(共に総務省統計局)より。※のデータは、2023年度雇用均等基本調査(厚生労働省)より





2022年の時点で、(非農林業従事者のうち)副業をしている人は305万人と、5年前に比べて60万人増加。また、追加就業希望者(現在就いている仕事を続けながら、他の仕事もしたいと思っている者)は493万人と、5年前に比べて93万人増加している。また、同調査によると、フリーランスが本業の人は209万人。複数の仕事をする、特定の組織に属さないなど、働き方の多様化が見て取れる。

2022年「就業構造基本調査」(総務省統計局)より



テクノロジーが進化し、変化が激しく先行きが不確実な現代において、「未来」を予測することはこれまで以上に難しくなっています。また、「人生100年時代」と呼ばれる時代を迎え、働き方や生き方、そして学びへの価値観も多様化しています。将来の目標を設定し、そこに向かって進学先や就職先を選び、スキルを身につけ、キャリアを重ねていく…。今の時代においては、そんな直線型のキャリアを描き、目標から逆算して最適解を選択するだけでは、変化に対応することが難しくなりつつあります。

キャリアのあり方が非直線的・複線的になるなか、人生を時代の流れや社会の波に翻弄された不本意なものにしないためには、何が大切なのか。人生の節目節目で主体的に道を選び、行動するためのカギの一つが、「機会をとらえる」ことだと私たちは考えました。自ら意図して起こせるチャンスもあれば、予想できない偶発的な出来事や出会いもあるでしょう。本特集を通して「人を創る機会と選択」について深め、未来を生きる高校生のために何ができるのか、先生方と一緒に考えていきたいと思えます。



# 私が紡いだキャリア

CASE  
01



アミー株式会社  
代表取締役  
渡部雪絵さん

CASE  
02



株式会社世羅高原農場  
代表取締役  
吉宗誠也さん

CASE  
03



ライター、作家  
ひらいめぐみさん

CASE  
04



株式会社  
LITALICOパートナーズ  
事業支援グループ マネージャー  
松本裕司さん

出産が転機となった起業家、嫌いだった地元に戻り家業を継いだ観光農園経営者、

20代で6回転職したライター、憧れた教師の仕事を手放した会社員…。

これまでのキャリアにおいて、どんな機会を捉え、どう選択を重ねてきたのか、4人にお話を伺いました。





Interview  
CASE 01

アミー株式会社 代表取締役

渡部雪絵さん

「出産」という転機をチャンスとし  
出会いや経験を活かしてつないでいく



わたべ・ゆきえ●1979年神奈川県生まれ。早稲田大学商学部を卒業し、2002年に三井住友銀行入行。05年に日本経済新聞社グループに転職。06年結婚。07年三菱UFJ証券(現・三菱UFJモルガン・スタンレー証券)に転職。12年にファンド会社に転職。妊娠を機に退職し、コンサルティング会社の業務委託で働く。出産後COACH JAPAN 会計部門の派遣社員に。15年ワンピースを企画・販売するアユワ株式会社設立。19年フェムケアブランドを扱うアミー株式会社設立。

取材・文／藤崎雅子 撮影／吉永智彦





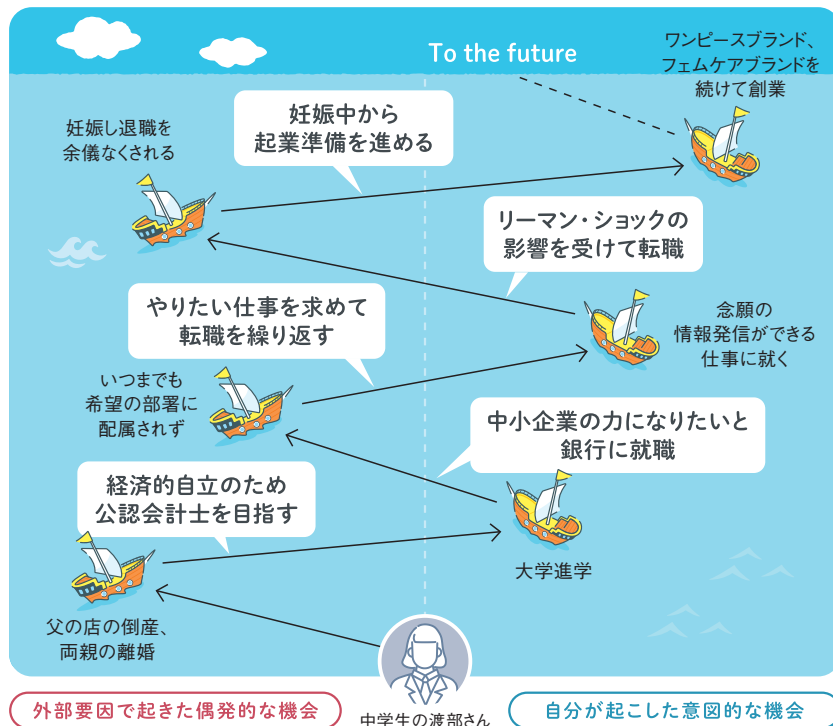
## やりたい仕事を求めて金融業界を転々

女性のキャリアにおいて、妊娠・出産をネガティブな出来事と捉える人も多いかもしれません。しかし私の場合、この機会こそが、私のキャリアを豊かにしてくれるものでした。

私が中学生のころ、父親が経営していたスポーツ用品店が倒産しました。両親は離婚し、その後は小学校教員だった母が家計を支えてくれました。そんな母の姿を見てきたからか、経済的に自立できる仕事に就きたく、公認会計士を目指して大学に進学。しかし、教授が同じ高校出身というご縁でマーケティングのゼミに入ると、「金融業界でマーケティングに携わりたい」という新たな目標をもつように。マーケティングを学んで父の商売が行き詰った原因も見えてきて、金融機関が適切な情報発信を行うことで中小企業の力になりたいと考えるようになったのです。

卒業後は三井住友銀行に総合職として入行。約3年間でさまざまな銀行業務を経験しました。しかし、やりたかった情報発信の仕事はできないままで、「そういう部署に行くには10年かかる」と。それならほかの会社でやろうと、金融

### ＼ 渡部さんのキャリアのあゆみ /



Interview  
CASE 01



経済メディアの記者になりました。その翌年に結婚。刺激的な経験ができたものの早朝・深夜も働くハードな生活には疑問を感じ、また記者の仕事には外野から情報発信しているような違和感をもつように。金融経済の内側から発信する仕事を求め、証券会社に転職しました。法人向け金融商品の部署に配属され、念願の情報発信の仕事も行えるようになりました。しかし、リーマン・ショックの影響で部署が解散。異動後の仕事には魅力を感じられず、早期退職を決め、小規模なファンド会社に年間契約社員として転職しました。

妊娠が発覚したのは、その会社1年目のことでした。女性が出産後も働くことに対する理解も制度も今ほどない時代。「契約更新できない」と言われ、辞めざるを得ませんでした。ショックでした。しかし、働いて私を大学まで行かせてくれた母の姿を見ていたからか、専業主婦になろうとは思わず、コンサルティング会社の業務委託で細々と仕事を続けることに。その会社で幸運だったことは、起業を目指している同僚がいたこと。「そんな選択肢もあるのか!」と気づき、「私も起業してみたい」との思いが芽生えたのです。

## 自分の好きなことで起業し社会への還元も図る

最初、わが子のオムツかぶれに困った経験から、肌に優しいオムツの製造・販売を思いつきました。メーカー業務を学ぶため、バッグメーカーで働いたりもしました。しかし、具体的に動き出そうとすると工場探しや設備費用の壁にぶち当たり、知り合いの経営者の方に相談。「子どもが成長したあともオムツに情熱を注ぎ続けられるか。自分が好きなことをテーマにしたほうがいいのでは」というアドバイスを頂きました。あれこれ考え、浮かんだのがワンピースです。私はワンピースが好きで仕事のとときによく着ますが、生地の硬さやポケットがないことなど不便を感じていました。それなら自分が欲しいと思うワンピースを作ってネット販売しよう。そう思いついたのです。

事業を始めるにあたって、どうしてもやりたいことがありました。売上の一部を子ども支援活動団体に寄付することです。妊娠で会社を辞めることになって落ち込んでいたとき、偶然インターネットで紛争地域の怪我をした子どもの映像を目にしました。「自分で人生を選べる環境にいて嘆いてばかりいられない」と思



# CASE 01



うと同時に、「自分にできることをしたい」と。金融業界で働いてきた私にできることは、資金を融通することだと考えたのです。

そんなチャリティーの側面も評価され、百貨店の期間限定出店に声がかかるなど事業は順調に滑り出し、周囲に助けられながら育児と事業に奔走する日々を送っていました。

ひょんなことから、生理用ナプキンの製造・販売という新たな事業に取り組み始めました。重い生理に苦しんでいた私に、知人が布ナプキンを勧めてくれたのが発端です。布ナプキンは洗濯がネックですが、リサーチしてみると、コットンの消費は自然を循環させることになるため、洗わず捨てても環境への影響は小さいことがわかってきました。肌にも自然にも優しい、使い捨てできるコットン製の布ナプキンがあったら助かる女性は多いのではないかと。その考えに仲間2人が賛同してくれ、共同でフェムケアブランドを立ち上げることになったのです。

生理用品に携わるなかで問題意識が高まり、最近、妊娠とキャリアをテーマに大学や男子校で講演を行うようになりました。日本社会は親子に冷たく子育てしながら働きにくいと言われるなかで、子どもをもつこと自体にネガティブな若い人が増えているように感じます。子どもの明るい声が聞こえてくる未来のために、男女問わず人体や出産の知識を備え多様な選択肢に気づき、子どもをもつことについて考えるきっかけになればと思い活動しています。

こうしてキャリアを振り返って気づくのは、「未来をつくる」という共通点。金融面からの事業者の後押し、ワンピースを通じた働く女性の応援、寄付による子どもたちの未来への投資、若い人への講演活動…未来をつくっているのだという実感が、私の原動力になっています。

想定外の出来事や失敗も多かったこれまで、たくさんの人と出会い、多様な生き方や考え方に触れ、支えられてきました。その一つに、キャリアは「積み重ねる」のではなく「つなぐ」というキャリア論があります。大事なものは、次にくる新しい環境や役割に、いかに自らが培ってきたものを活かし、主体的につないでいくか。その考え方に励まされながら、自分の心に従い流れるように過ごすなかで、キャリアがつながっていった。私は運が良いのでしょうか。しかしながら、運を動かすには、まず自分が動く必要があるのだと思っています。



Interview  
CASE 02

株式会社世羅高原農場代表取締役

吉宗誠也さん



嫌いだっただ元で家業を継いだのは「ここにしかないもの」に気づいたから

よしむね・せいや ● 1976年生まれ。広島県世羅町出身。地元の世羅町を離れて、福山市の高校に進学。そのまま県外の大学に進む。もともと実家は養鶏場を営んでおり、父親が近所の農園を引き継ぎ、花の観光も始めた。20歳のときに父親が他界。大学卒業後はUターンで農園を引き継ぎ、今年で25年に。現在は「世羅高原農場」「Flower village 花夢の里」「そらの花畑 世羅高原花の森」「せらぶじ園」の4つの観光農園を運営し、花観光農園を基軸にした観光まちづくりを推進している。

取材・文／塚田智恵美 撮影／太田裕子



Interview  
CASE 02



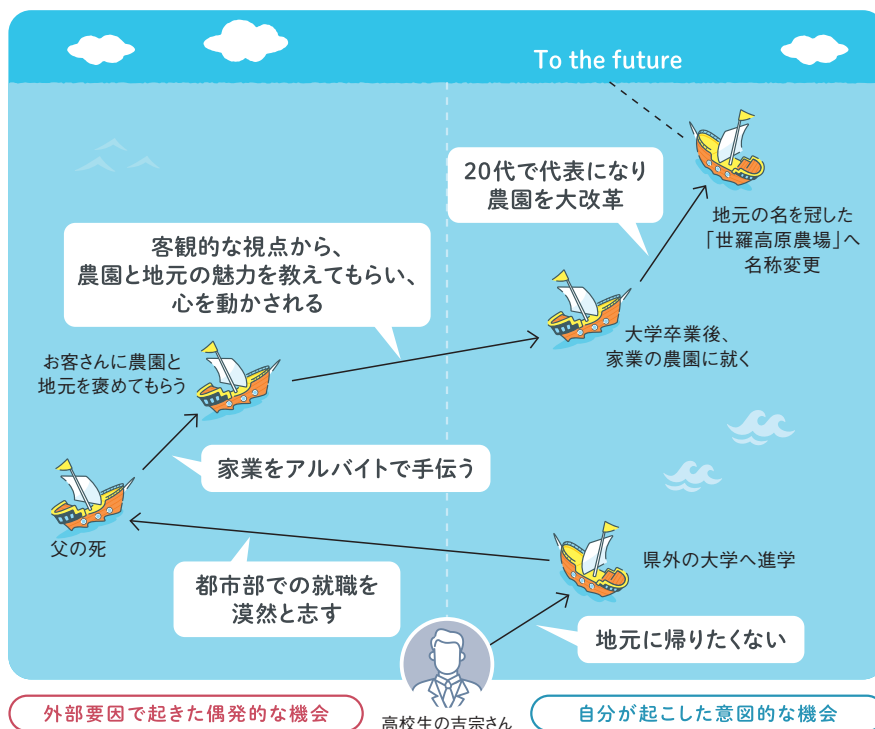
## 「いいところに住んでいるわね」心がどんどん熱を帯びていく

広島県の中東部に位置し、なだらかな山の連なる地域、世羅高原。この地で生まれ育った私は、幼いころから自分の住む町のことが大嫌いでした。

自宅があるのは山の中で、見渡すかぎり自然の風景。学校までは遠く、帰りは山道を上ることになり、体の弱かった私には苦しい日々でした。中学3年で担任の先生からたまたま紹介されて、世羅の町から離れた福山市の高校に進学し、寮生活を送ることに。地元から離れたい思いは一層強まり、県外の大学に進みました。もう地元に戻るつもりはない。将来は都会の企業で、メディア関係の仕事に就けたら、と漠然と憧れを抱き始めた大学1年生の冬に、父が亡くなりました。

もともと養鶏場を営んでいた実家では、私が高校生のころに父が近所の農園を引き継ぎ、花の観光農園を始めていました。ただ当時の私はまったく興味なし。仕事人間で厳しい父とはあまり会話がなく、私に家業を継ぐ思いなどまったくなかった。そんななかいきなり父がいなくなり、母が経営を継ぐもののドタバタ状態です。私も繁忙期には帰省して、アルバイトで農園を手伝うことにしました。

### ＼ 吉宗さんのキャリアのあゆみ /



Interview  
CASE 02



春のチューリップ畑。65,000㎡の広大な土地に200品種75万本のチューリップが植えられ、色鮮やかに開花するという。(右ページの写真は同じ場所。取材時は冬季の開園中で、チューリップの植え付けを終えたばかりだった)。

そして大学2年生の春。満開のチューリップ畑の前で接客をしていた私は突然声をかけられたのです。「あなた、いいところに住んでいるわね!」おそらく都心部からいらしたそのお客様はこの農園、そして世羅の町がいかに素晴らしいかを、勢いよく私に語り出しました。

ここはそんなに褒めてもらえるような場所だったのか——。聞いている私の胸の奥がどんどん熱くなっていきます。自分の内側で何かのスイッチが入ったような感覚に。よく知った町が、それまでとはまったく違うように思えてきたのです。そのとき自分の内側で生じた熱は冷めることがなく、大学卒業後、地元に戻り実家の観光農園業を継ぐことを選択しました。

## 「きっと咲く」その前向きさがチャンスに乗れる自分をつくる

今思えば私は、お客様の言葉によって「ここにしかないもの」の可能性に気づかせてもらったのだと思います。このあたりは標高が高く気温が低いので、市街地より花が遅れて咲きます。ちょうど5月の連休にかけて春の花が満開になり、市街地では育てにくい花を育てるのに向いている。広大な土地があり、都心では得られないような一面の花畑の感動を味わえる…。アクセスの利便性や都会らしい華やかさ、新しさといった「ここにはないもの」にばかり意識が向いていた私が、「ここにしかないもの」に気づいた。しかもそれらは、地形や気候に由来する、そう簡単には変わることはないもの。





その「ここにしかないもの」の価値を、花や観光サービスを通じて町の外に向けて届けたいと考えるように。そして修行を経て20代で代表になった私は、農園の大改革を決めました。花の種類や植える時期など工夫を重ね、経営を学び、数千万円の借金をして園の施設や花畑の大改修を実施。世羅高原ならではの体験を、さまざまな客層のお客様にお届けしたいとチャレンジしました。

すると地道に続けたことの成果が表れ、入場者数や売り上げ数が右肩上がり伸びていったのです。このことで自信がつき、2007年に創業時からの「旭鷹(きょくほう)農園」という社名を「世羅高原農場」に変更しました。地元では私は群を抜いて若い経営者であり、町の名前を冠した社名をつけるのはかなり勇気がいりましたが、「私たちの仕事はこの町を発信していく仕事なのだ」と、不退転の決意を社名に込めたのです。気持ちが固まったところに、たまたま地方新聞からコラム執筆の依頼を受け、町の良いところを発信できる機会だと喜んで引き受けることに。メディアに取り上げてもらう機会も増えていき、新しい企画を立ち上げたり、花の種類を増やしたり。そして今や運営する観光農園は4つに。現在5つ目の施設の開園に向けて取り組んでいるところです。

2024年春に開催した「世羅高原春の花めぐり」では総計17万7000人のお客様にいらしていただきました。この数字は世羅町の人口の約12倍にあたります。高校時代の私には、それほどの観光客が地元を訪れている未来も、この地で働いている自分の姿も、まったく想像できませんでした。自分の住む町が嫌いで「こんな田舎には何もない」と否定的な捉え方をしていた、あのころの私のままなら、挑戦するタイミングが目の前に訪れたとしても、気がつかずにスルーしていたかもしれません。前向きに、「今ここにあるもの」の良いところを見ながら取り組んでいると、やってくるチャンスに全力で乗ることができるのです。

チューリップ、ひまわり、ダリア…。どの植物も、花が咲くのは一年にたった一度です。私たちはその一瞬のチャンスにかけて1年間全力で取り組みます。天候など状況は毎年変わり、いつ咲くか、どう咲くか、そのとき周りの環境がどうなっているのか、事前に予想はできません。それでも、来たる機会を必ずつかむため、咲くことを信じて取り組み続ける。その前向きさが未来を切り開くのは、きっとキャリアも同じですね。



Interview

# CASE 03

ライター、作家  
ひらいめぐみさん

6回転職して行き着いたのは  
自分の心に忠実な表現や人生の選択

ひらいめぐみ●1992年生まれ、茨城県出身。大学時代に「大好きなメロンパンを通じて、コンゴ民主共和国の紛争問題を伝える」を掲げて「メロンパンフェス」を主催。その活動を優先するため就職せずアルバイトを続けるも、健康や年収など生きる基盤を整えたいと就職。その後転職を繰り返し、現在はフリーランスでライターとして活動するかたわら作家として執筆も行う。2022年に私家版「おいしいが聞こえる」、2023年「踊るように寝て、眠るように食べる」、2024年「転職ばかりうまくなる」を刊行し注目を集める。

取材・文／塚田智恵美 撮影／澤崎信孝





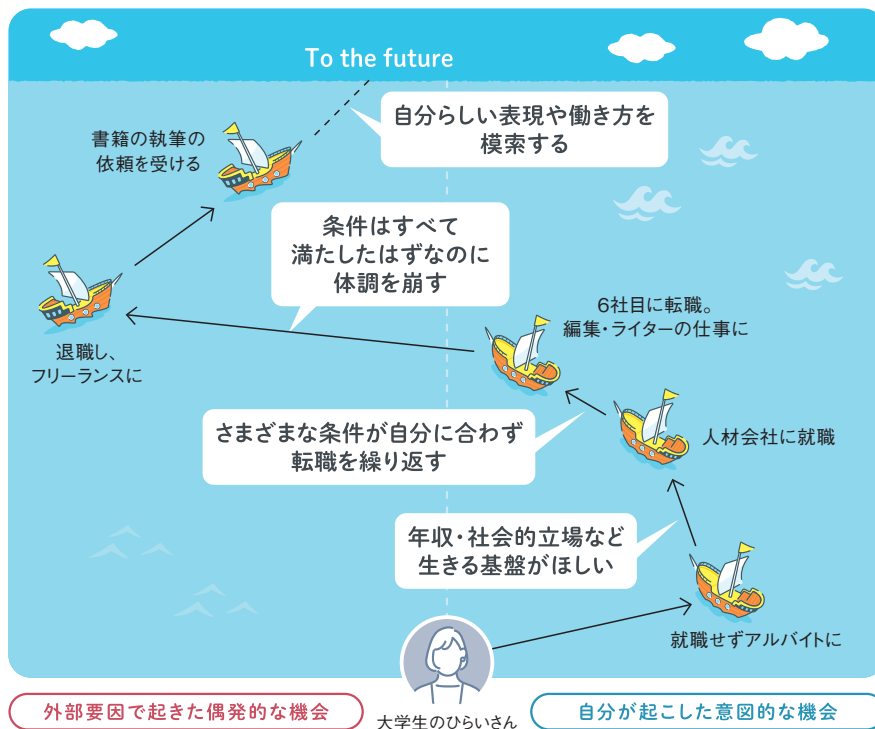
## 「転職」はネガティブじゃない？

20代で6回転職。友達にはふざけて「転職のプロ」と呼ばれることもあります。今思えば、その根っこには、違和感をスルーするのが苦手な性格があるのかもしれない。

検事に憧れて、大学では法学部に進学。しかし教授に「法曹の仕事は、人の不幸の上に成り立つもの」と言われたことで気持ちが変わりました。今思えば、法曹界の良い面ばかりを見ている学生たちに、違う視点を与える言葉だったのかもしれない。しかし私は「誰かの不幸せによってお金をもらうような仕事に就きたくない」と考えてしまって、検事の夢を断念しました。

そのころ、普及し始めていたスマートフォンに欠かせないレアメタルを生産するコンゴ民主共和国で、希少な金属が紛争の軍資金となって紛争状態を長引かせていたり、女性に対する性的暴力が横行したりしていることを知りました。私たちの便利さや幸せは、誰かの犠牲の上に成り立っている。これに強く違和感を覚えた私は、コンゴの問題を多くの人たちに伝えるため、自分なりに動

### ＼ ひらいさんのキャリアのあゆみ /





き出すことに。試行錯誤を重ねて、自分の大好きなメロンパンを切り口にしたイベントを思いつきました。

そして主催した「メロンパンでコンゴを救う」メロンパンフェスは盛況で、メディアにも取り上げられました。すると「どうせ大学生が就活のネタづくりのためにやっているんだろ」などのコメントが。誠実さを行動で示すために、大学卒業後も活動を続けていこうと決め、就職しない選択をとりました。

イベントの活動をしながらコンビニでのアルバイトを半年続け、その後はアパレルブランドの倉庫でのアルバイトを1年ほど。しかしイベント準備との両立で、多忙を極め体調を崩してしまい、健康や年収、社会的立場など生きる基盤をちゃんとつくりたいと就職活動を開始。人材会社の営業職に採用されました。

そこでこんな言葉を聞いてはっとしました。「6回転職している人がいたとしたら、それは『6回採用している人がいる』ということです」この言葉を聞かなければ、のちに「転職」にネガティブなイメージをもつこともあったかもしれません。

しかし、働きながらも、日に日に「この仕事は自分に合わない」と感じるように。生じた違和感を、世間体のためにと押し殺して続けていくのは私にはできず、退職。その後はWebマーケティング、書店スタッフ、商業施設の事務局・広報と転職を重ねていきました。

## いちいち違和感を抱く自分と借り物ではない自分の表現

6社目となる、お菓子のスタートアップ会社での採用面接は、他とは違いました。ネットで公開していた私の文章を読んできた社長が「ひらいさんのこの文章を生かしてほしい」と、自社メディアの運営や編集、ライティングの仕事をすすめてくれたのです。趣味の範囲でやってきた「文章を書くこと」を認めてもらい、不思議な気持ちになりました。そして入社を決意。これまで「自分が苦手なことに取り組むのが仕事」と思っていた私ですが、自分が無理せずにやれること、周りから求めてもらえることを仕事にしてみたら、びっくりするほど働きやすかったのです。

隅田川近くにあるオフィスに通う毎日。人にも恵まれて、自分の好きな仕事をしている…。それなのに私はまた違和感を覚え始めました。職場に窓が少ないこと。会社のそばにランチを食べられるようなお店がほとんどなく、みんなデ



Interview  
CASE 03



スクでごはんを食べていること。

5回転職してきて、これ以上自分にとって居心地よく働ける会社はないと確信していました。それなのにまた私は仕事を続けられないのか？どれも小さな気がかりじゃないか。そんなことばかり気にしては贅沢だ。そう自分に言い聞かせようとしたものの、違和感は体調に表れ、少しずつ不調をきたし始め、さらに、会社員としてさまざまな制約のなか文章を仕事にすることのつらさを感じるように。ここまで条件の良い会社でこうなるということは、もう私には「会社で働くこと」そのものが合っていないんだ——そう踏ん切りがついて退職し、フリーランスになる決意をしました。

親が会社員だったということにも影響されていたのか、フリーランスで働くことはそれまで選択肢にも入っていませんでした。自分の意思だけで選択していたら、まず辿りつかなかったでしょう。自分にとってこれ以上ないと思うほど条件の良い会社でも、働き続けられなかった。その事実が自分に大きく作用して、現在のフリーランスの道に至りました。

2022年春にフリーランスになってからはさまざまな機会に恵まれ、依頼を受けてエッセイを書いたり、書籍を出したりしました。フリーランスは人間関係や働く環境が固まっていないため、自分が守りたい生活を大切にしながら、柔軟に仕事内容を模索していくことができます。自分には合っている働き方なのかもしれません。

今の仕事を定義するなら、身の回りの出来事を題材に「借り物ではない、自分の心に忠実な言葉」で人に伝える仕事です。例えば慣用句や常套句は便利ですが、その表現は、本当に自分の感じたことに沿っているでしょうか。「目から鱗が落ちる」と言いますが、私に生じたのは本当に「鱗」が落ちる感覚だったか、もっと別のものではなかったか。そうやって自分の心に忠実な言葉を追究していくと、自分らしい文章になっていく。自分の心に忠実に書き続けるには、小さな違和感であっても放置してはいけないのです。

職場に窓が少ないことが、まったく気にならない人もいると思います。でも、私は気になってしまった。そういう小さくて確かな違和感を我慢しないことが、自分の心に忠実な表現や人生の選択につながっていく。いちいち違和感を抱く自分を「贅沢」「わがまま」と思ったこともあったけれど、そういう自分だからこそ、この道に辿り着いたのかもしれません。

Interview  
CASE 04

株式会社LITALICOパートナーズ 事業支援グループ マネージャー

松本裕司さん

目  
の  
前  
の  
こ  
と  
に  
全  
力  
で  
取  
り  
組  
み  
な  
が  
ら  
や  
り  
た  
い  
仕  
事  
の  
本  
質  
を  
軸  
に  
選  
択



まつもと・ゆうじ ● 1986年大阪府生まれ。2011年に中学校と高校の教員免許を取得。中学校の体育教師を経て、12年特別支援学校に配属。13年に認定NPO法人カタリバに転職、東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県女川町で運営されていた「コラボ・スクール女川向学館」にて小・中学生や高校生の学習支援や心のケアに取り組む。結婚をきっかけとして大阪に戻り、15年に株式会社LITALICOパートナーズに転職、障害者の就労移行支援事業に携わっている。

取材・文／藤崎雅子 撮影／吉永智彦





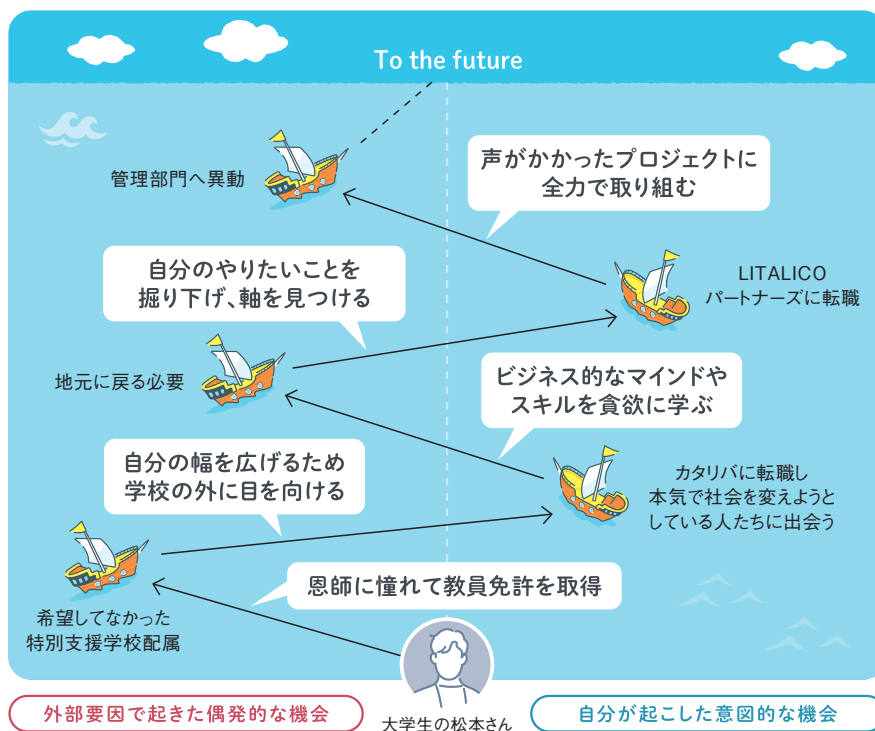
## 憧れの仕事を手放し出会った本気で社会に挑む人たち

恩師に憧れ体育教師になった僕が、なぜ今、障害者就労移行支援事業に携わっているのか。中学時代の原体験から振り返ってお話しましょう。

僕は中学生のころサッカー部のキャプテンをしていました。部員数が約90人と多く、学校が荒れていたこともあり、多様な生徒がいましたが、顧問だった体育の先生はどんな生徒でも平等に接して誰一人見放すことはなかった。私もそんな先生の姿に共感し、キャプテンとして分け隔てなく部員と関わられた。だから最後は大会で大きな結果につながったのだと思います。「諦めずにやれば結果が出る」「関わり方で人は才能を発揮する」…多くのことを学びました。恩師のように、自分も中高生の生き方や成長に関わる存在になりたい。大学生活は遊んでばかりでしたが、最後はそう腹を決め、体育教師になったのです。

1年間の中学校常勤講師を経て教員採用試験に合格し、配属されたのは特別支援学校でした。恩師のような教師生活を思い描いていた自分にとって、想定外の出来事です。それでも、多様な生徒との関わりには多くの学びがあり、

### ＼ 松本さんのキャリアのあゆみ /





悩みながらも日ごとに学校が面白くなっていきました。ただ、この先もやり続けたいかという、少し違うような気がしたのです。

元々、「さまざまな仕事を経験したほうが面白い先生になるのでは」という考えがあったので、いったん教員以外の仕事を経験するのも良いだろうと思いました。そこで、学校外から教育に携わる仕事がないか海外も含めて調べるなか、たまたま見つけたのが、東日本大震災の被災地で認定NPO法人カタリバが行う教育支援の仕事です。私が教員になった年、東日本大震災は発生しました。その年、被災地の中学校と勤務校をオンラインでつないで交流したことがあり、現地の困難な状況を目の当たりにして「自分にできることはないだろうか」と思ったものです。その時の思いに背中を押され、被災地に飛び込みました。

地元の大阪を離れ、宮城県女川町へ。そこでカタリバは地域と連携したスクールを開設し、小学生から高校生までの学習支援や心のケアを行っていました。私はその運営スタッフの一人として、子どもたちとの対話や、学校や企業と連携した企画などに、夢中で取り組みました。

そこでの出会いが、以降の私のキャリアに大きく影響しています。一緒に働いていたのは、元は東京のビジネスマンや経営コンサルタントなど、さまざまな業界から、カタリバのビジョンに共感して集まった人たち。そして、本気で社会を変えようと取り組んでいたのです。圧倒的な当事者意識とロジカルなビジネススキルをもって、国や自治体を巻き込み、海外から資金を調達してくる…。そんな仲間のマインドや行動に大きな刺激を受けました。必死に学ぼうとする僕に、職場の皆さんは忙しい時間を割いてとことん付き合ってくれ、そのときに学んだマインドやスキルは、今でも仕事をするうえでの土台になっていると感じます。

## 転職を機に考え気づいた自分がやりたいことの軸

その間に地元大阪にいた彼女と結婚。家庭のことを考え、大阪に戻ることにしました。転職にあたって改めて考え、気づいたことがあります。自分は学校教育に興味があると思っていたけれど、その根底には、外部環境によって能力が発揮されない状況にいる人をなんとかしたいという思いがあるということです。思い起こせば中学時代も、周囲のレッテルによって力を発揮する機会







が奪われることに、無性に腹が立ったものです。子どものころからの自分の習性とキャリアの軸が、すっとつながりました。そして、その軸があれば、教師や学校と離れた仕事でも、自分は満たされるのではないかと考えたのです。

そして選んだのが、現在勤務する株式会社LITALICOパートナーズの障害福祉サービスの仕事です。「障害は人ではなく、社会の側にある」という考え方に基づいた支援のあり方に共感し、自分の軸に合う仕事だと思いました。また、カタリバの仕事を通じて「思いだけで社会は変わらない」と痛感していたので、理念を大切にしながらビジネスにも強い人材が豊富な職場で、思いを実現させるための力をつけたいと思ったのも、選択理由の一つです。

入社後、配属された事業所で障害のある方を直接サポートする仕事から始め、事業所のリーダー、そして複数事業所を統括するエリアマネージャーへとステップアップしていきました。初めての業界なので、社内研修の受講だけでなく、自分で本を読んだり先輩に聞いたりしながら知識やスキルを身につけていきました。

当社には部署の枠組みを越えたさまざまなプロジェクトがあります。僕も「明るく元気だから」とビジョン浸透イベントの司会を頼まれるなど、いくつかのプロジェクトにアサインされました。「やるならより良くする」という性分なので、自分から手を挙げたことでなくても、思いをもって意見や提案を発信していました。そんな姿勢を見ていただいたのか、管理部門に抜擢いただき、現在は事業部全体の働きやすい組織づくりに携わっています。

日々難しさを感じていますが、ビジネススクールや社外コミュニティで学び、社内の現場感覚も大切にしながら取り組んでいます。従業員の皆さんから、「本来の業務に集中できるようになった」「生き生き仕事ができる」などと言ってもらえることが喜びです。

こんなふうに私のキャリアは何度か方向転換し一見ばらばらです。しかし、子ども、障害のある方、従業員…と対象は変化したものの、「人が能力を発揮する支援」という一本の軸でつながっていました。岐路に立つたびに自分を掘り下げ、少しずつその軸に気づいていき、思いに正直に行動するなかで生き方を変える出会いがあり、やってきた機会に全力を尽くすうちに道が拓けた…。当初思い描いていたキャリアとはまったく違いますが、「悪くないな」と思える人生を歩んでいます。



# 機会と選択を 繰り返して 創られるキャリア

将来の目標から逆算した進路指導だけでは難しくなっています。

そうしたなか、「自分が起こした意図的な機会」だけでなく、

「外部要因で起きた偶発的な機会」も能動的に捉え、

選択・行動することの繰り返しが高校生の視野を広げ、キャリア観を形成していくのではないかと。

そうした仮説を、解説編と対談編を通じて探ってみました。

取材・文／堀水潤一 撮影／平山 諭

## Part 1

### 偶発的な機会や小さな一歩から 広がる新しい世界

解 説

Explanation

「やりたいこと」の有無にかかわらず、高校時代の豊かな機会や体験は、若者のキャリア観に大きく影響します。次世代社会のキャリア形成に詳しい研究者の古屋星斗さんに解説して頂きました。



リクルートワークス研究所 主任研究員 古屋星斗さん

ふるや・しょうと●一橋大学大学院社会学研究科修了後、経済産業省入省。産業人材政策、投資ファンド創設、福島の復興・避難者の生活支援、政府成長戦略策定に携わる。2017年より現職。専門は労働市場分析、未来予測、若手育成、キャリア形成研究。一般社団法人スクール・トゥ・ワーク代表理事。近著に「会社はあなたを育ててくれない」(大和書房)。

体験や機会があつてこそ  
生じる学びたいという動機

ベストセラー『LIFE SHIFT』で“人生10  
0年時代”を提唱した組織論学者のリンダ・グ

ラットンは、「教育→仕事→引退」という3ステージの人生の崩壊と、それに代わるマルチステージの人生を提起しました。確かに今、人生における選択の回数は飛躍的に増え、それらが訪れる時期も早まっています。転職、





副業、起業、育休、介護離職などの選択の機会が次々と現れる結果、高校卒業時の進路選択は、人生を左右する最大の機会とは言えなくなりました。数ある選択の最初の一つに過ぎなくなっているわけです。

だからといって、その最初の実験の重要性が下がったわけではありません。ただし、その意味は大きく変化しつつあります。「自分は何をしたいのか」を考え抜いて選んだ経験が次のステージでの満足度につながり、その次の選択でも生きてくることがわかっています。例えば、「21世紀出生児縦断調査」(文部科学省・厚生労働省)によると、大学などの進学先を、「将来就きたい仕事と関連しているから」という理由で選んだ人は、大学生活の満足率が50%である一方、「合格できそうだったから」という理由で学校選択を行った人は満足率が25%です。

では、学びたいとか、こういう仕事に就きたいといった動機はどのように生まれるのでしょうか。動機は、もてと言われてもてるものではありません。真の動機は体験から生まれるのです。先の調査からは、職場体験や職場見学が学習動機を増進させることもわかっています。考えるまでもなく、例えばJAXAで宇宙飛行士の話を聞き宇宙関係の職に就きたいと思えば物理学を学びますし、JICAで海外協力隊の話を聞き国際貢献したいと思ったら英語を勉強しますよね。体験があって学びがある。ところが日本の学校では、この

順番が逆になっているケースが多いように感じます。教育実習もそうですが、座学で理論を学んだ後に実習がある。体験があって初めて、学ぶ必要性を実感するのに、そのときには時間が足りません。社会人になってから「あれを学んでおけば…」と後悔してはもったいない。

こんな調査結果もあります。「大手企業新入社会人の就労状況定量調査」(リクルートワークス研究所)によれば、入社前の社会的経験(「複数の企業・職場の見学」「中高時代に複数の社会人から仕事の話聞く経験」「長期のインターンシップ」「知人ではない多人数の前でのプレゼン・スピーチ」など)の多寡が、若手社員の職場に対する評価やキャリア意識(満足感やいきいき感)と相関しているということがわかっています。

こうした調査を総合すると、若いときの社会的経験が、こんなことを学びたい、こんな仕事に就きたいという動機につながり、それが進学・就職先での満足度やその後のキャリア形成に影響を与えていることがわかります。

## 本人の合理性を超えた機会の提供によって視野が開かれる

とはいえ、現実には将来の目標や就きたい仕事を見つけている高校生は決して多くはない。やりたいことがあるというのは、恵まれていることでもあるのです。ただ、その恵まれた高校生にも落とし穴があります。それは「現

在地と目標との間にあると本人が認識している機会しか、本人が機会として認識できない」ということです。若者に限らず、誰も目標が明確であればあるほど、その途上にない機会は、無駄なものとして切り捨ててしまいがち。目標があるのなら、最短距離を行きたくなるものだからです。

しかしながら、「計画的偶発性理論」を提唱したスタンフォード大学のクランボルツ教授や、「キャリア・ドリフト」という概念を提唱した神戸大学の金井壽宏名誉教授らが指摘する通り(次ページ参照)、キャリア形成において偶発的な出来事の影響力は計り知れません。多くの大人はこれまでの人生を振り返っ

たとき、偶然の積み重ねの上にキャリアが築かれてきたことを肌感覚で知っているでしょう。

だからこそ、やりたいことが明確な生徒に対しては、新しいトビラを開けるチャンスを見落とさないよう、時おり、本人の視界の外にある機会に目が向くようフォローすることが大切です。

もちろん、早くに目標を決めるにこしたことはありません。最大の理由は、新たな目標が見つかったとき再挑戦しやすいからです。私の好きな言葉に、「目的地のない船に追い風は吹かない」というものがあります。目指す方向が決まって初めて、今吹いている風が追い風なのか向かい風なのか判別できるし、今置かれている環境が良いか悪いかも判断

Worksheet

あなたはこれまで、どんな「機会と選択」がありましたか？

To the future

外部要因で起きた偶発的な機会

自分が起こした意図的な機会

学生時代のあなた

さまざまな機会の積み重ねによって、ありたい姿や就きたい職業が見えてきたとしても、それはあくまで「仮決め」のようなもの。人生100年という響きから長距離マラソンを走り続けるイメージがあるかもしれませんが、選択の回数が増えるこれからの社会は短距離走の連続。ひと呼吸おいた後、次の未来が広がっていきます。

多くの人は「さまざまな機会によって自分のキャリアは創られてきた」と振り返ります。機会には、自ら起こした意図的なものもあれば、「人に恵まれた」「たまたまチャンスが転がってきた」など、外部要因で生じた偶発的な機会も少なくありません。そうした機会をどう捉えるかが主体的なキャリア形成の鍵となります。





できます。

ただし、その目的地はあくまで「仮決め」のようなもの。次のステージで何が起ころかは、その時点ではわかりません。大手企業で活躍していた方が退職後に始めた、まったく異なる仕事を「これこそ天職」と感じたという話もあります。変化の激しい現代社会においては、いつになっても「本決め」する必要すらないのかもしれませんが。

## 大学から社会までつながる 探究での学びの近況とは

では、「やりたいことがない」多数の高校生には、どのようなアプローチが有効でしょうか。キャリア観を変えるような社会的経験や機会に意図的に出会うには、それなりの労力がかかります。企業の人に連絡をとったり、地域の大人と話したりといったアクションは高校生にとってハードルが高いでしょう。けれど、そうした耳目を引く行動だけにキャリア観を変える力があるわけではありません。その前の助走のような行動にも少なくない力があることがわかっています。例えば、●挑戦したいことを友人に話してみる。●話したことのない人とコミュニケーションをとる(小さな他流試合)。●友人に誘われたイベントに行ってみる。●がんばっている友人を応援する(応援しているうちに疑似体験したり、焦りが生じたり)など。

しかし、こうしたスモールステップの重要性を提唱し、奨励し始めると今度は、若い人か

ら「スモールステップはどう起こせばいいですか?」と質問されるようになりました。私としては、必要性さえ感じれば誰でも実行に移せる小さな行動と考えていたため、こうした問いは想定外でした。

反省を込めて、検証し直すなか、浮上してきたのが、「言い訳」の有無でした。例えば、「先生に言われて仕方なく」「親に言われてシブシブ」「友達にむりやり」といった言い訳があることで、人は行動しやすくなります。キャリアに関する何らかのイベントに参加する際、向上心がある様子を周囲に見られることを気恥ずかしく感じる年頃の高校生も、「先生に言われて仕方なく」という顔をしていれば気が楽です。変化が起こる瞬間に注目した場合、動機は体験から生まれており、その体験に接触する際のきっかけは自発的なものに限らなかったのです。若手向けの勉強会後のアンケートで、「本当は来る気はなかったのですが、上司の指示で参加したところ、大変刺激を受けました。例えば…」という長文の感想を頂くことがあります。

思うに、そうした機会でも最も得をしているのは、なにかしらの言い訳があって参加した人だと思います。自らの意思で参加した人は、いずれ別の場所で似た知見を得ることはできそうですが、そうでない人は、一生出会うことがなかったかもしれない知見を得た可能性が高いからです。

総合的な探究の時間も、ある意味、言い



## キャリア理論解説

### 計画的偶発性理論

スタンフォード大学のクランボルツ教授が1990年代に提唱したキャリア理論。個人のキャリアの重要なチャンスの80%は予期せぬ出来事によって起こるとし、そうした偶発的な出来事が到来した際に機会を逃さないための力、行動特性として「好奇心」「持続性」「柔軟性」「楽観性」「冒険心」の5つを提示。また「未決定」の状態を単なる優柔不断ではなく肯定的に捉え、学習をもたらすための望ましいものの一つとした。

### キャリア・ドリフト

金井壽宏(神戸大学名誉教授)が提起した概念。ドリフトとは漂流のことで、流れの勢いに乗るというニュアンスも。自分のキャリアについて大きな方向づけ(キャリア・デザイン)さえできていれば、節目と節目の間は偶然の出会いや予期せぬ出来事をチャンスとして柔軟に受け止めるために、あえて状況に流されるままであること(キャリア・ドリフト)も必要と指摘。

### 越境学習論

日本で2010年代以降注目されている理論。代表的な研究者である石山恒貴(法政大学大学院政策創造研究科教授)によれば、自らが「準拠している状況」と「その他の状況」を分ける境界を往還し、そこから学びを得ること。いわゆるホームとアウェイを往復することで、ホームだけでは得られない経験や知見を得て、ホームで得たものに組み合わせていく。

訳から始まる時間と言えるかもしれません。解決したい課題のあるなしに関係なく全員が受ける必要があり、けれど取り組むうちに、のめり込んでいく生徒がいるのはご承知の通りです。総合型選抜への準備も似たところがあります。高校生からよく「職業について調べているので話を聞かせてください」というインタビュー依頼があります。聞けば、レポートにまとめポートフォリオの一つとして大学に提出する材料にしたいとのこと。また、ボランティア団体の代表からは「最近、高校生がたくさん来る」と聞きました。どうも自己PR書類のための

ボランティア証明書が欲しいらしいのです。

こうした行為を、大学合格を目的とした打算的なものと切り捨てることは簡単です。けれど、やりたいことを見つけたくても、きっかけがなく、将来に対してモヤモヤしている生徒にとっては実は大きな一歩を提供している。ボランティア団体の代表もこう続けていました。「ですがその後、ボランティアを熱心に続けてくれる子が何人も残るんです」と。言い訳をきっかけに何らかの機会に触れることで開かれる新しい世界もあるのです。

(次ページからの対談もご覧ください)

# Part 2

## 学校現場にあふれる 生徒の未来を切り拓く機会

対 談

Dialogue

引き続き古屋星斗さんに登場いただき、埼玉県教育局の上田祥子さんを交え、機会が果たす役割について語り合っていました。

——上田さんは、さまざまな機会と選択を経て（次ページ参照）、埼玉県教育局で産業教育・キャリア教育担当の指導主事をされています。加えて、全国の高校・少年院・児童養護施設などでキャリア教育を行う社団法人の理事

もされています。古屋さんとは、その団体を通じての知り合いだとか。

**上田** 古屋さんが代表を務める別の団体と2019年にイベントを実施して以来のお付き合いです。古屋さんは気鋭の研究者でありな

うえだ・さちこ ●東京学芸大学中学校教員養成課程国語科卒業後、不動産ディベロッパーを経て専業主婦に。出産を機に教育の重要性を改めて痛感し、2011年度より埼玉県立高校国語科教師。JICA教師海外研修参加経験も活かしSDGsを取り入れた授業実践が話題に。2020年度川越初雁高校に赴任。同年一般社団法人ハッシュダイソール理事就任。2023年度より現職。三女の母。

上田祥子さん

埼玉県教育局 県立学校部 高校教育指導課  
産業教育・キャリア教育担当指導主事

古屋星斗さん

リクルートワークス研究所  
主任研究員





がら、高卒就職・非大卒人材という見過ごされがちなところに光を当ててくださる稀有な人。若年者へのキャリア教育の推進を応援してくれています。

**古屋** 上田さんは生徒を第一に考える先生ですが、だからこそ教室にとどまらず、外部の力をどう借りるか、行政の仕組みをどう活用するかなど広い視野から行動している人です。大きなことを言わせてもらうなら、すべての人が輝ける社会を創ろうと考えている同志だと思っています。

——立場は違っても、同じ方向を見ている

人って惹かれあいますよね。

**古屋** 確かに上田さんのネットワークと私のそれが重なることは少なくありません。ただ、知り合いの知り合いが自分の知り合いだったとき、よく「世界は狭いね」と口にしますが、そんなとき「それって勘違いかも。単に自分の世界が狭いだけでは？」と自問するようにしています。知らない世界はたくさんあるのに、そこと接する機会がないだけかもしれませんから。

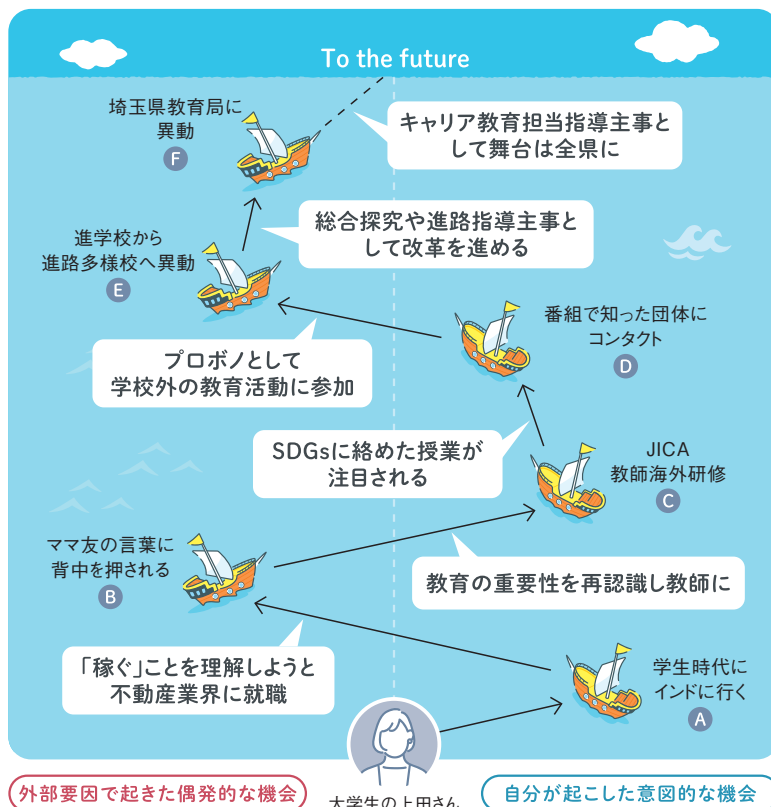
**上田** 確かに類は友を呼びますが、閉じた関係だけに終始するとエコーチェンバー

## 上田さんの機会と選択

**A** 教員一家に育ち教職を目指すも大学時代に訪れたインドで人々のパワーに圧倒され人生経験不足を痛感。「このままでは説得力のある教師になれない」と思い、まずはお金を稼ぐことを理解しようと不動産関係の企業に就職。

**B** 結婚を機に退職。専業主婦として子育てするなか改めて教育の重要性を実感。ある日ママ友から言われた「教師って尊い仕事だと思う」という言葉に押され県立高校教師に。保育園の送迎を手伝ってくれたご近所さんに感謝。

**C** 教師が挑戦する姿を生徒に見せたいという思いでJICAの教師海外研修に参加。発展する外国の姿から日本の未来に危機感を抱き、SDGsと関連づけたプレゼンの授業を実施。授業実践報告書を通じてネットワークが広がる。



**D** たまたま視聴したNHK『クローズアップ現代』で、非大卒の若者に教育とインターンの機会を提供する団体を知る。自分がしたいのはコレと思い、「国語の授業をさせてほしい」とコンタクト。現在、その社団法人の理事を兼任。

**E** 同僚が行っていた異学年のグループ学習に感激し、翌年、総合探究の責任者として全校に展開。また求人票の整理に追われる現場に愕然としSNSで発信。進路指導主事として、求人情報をDX化するサービスを民間企業と開発。

**F** 教師13年目に埼玉県教育局に異動。産業教育・キャリア教育担当指導主事となった翌年「生徒と教師が主語のキャリア探究へ」を掲げ、「お仕事図鑑pitchトーク」「オンラインキャリア探究セミナー」などの施策を全県で実施。

(※)に陥りかねませんよね。

**古屋** まさにそう。なので私は信頼する大先輩に時おり「僕が今、やるべきことってなんでしょう?」「この瞬間、僕が会うべき人はいますか?」とアドバイスを求めるようにしています。

**上田** 私も、普段は赴かない居心地の悪いような場所にもあえて足を向けるように心掛けていますし、生徒にもコンフォートゾーンを抜け出すよう促しています。探究のテーマを見つけれない生徒にはよく「本屋さんに通ってみれば」とも言います。書店に行くと、ネットでAIが薦めてくる情報とは違う、何かしら偶発的な気づきや出会いがあるじゃないですか。

——ただ、外向き志向の子は別として、普通の生徒がアンコンフォートゾーンに踏み出すって難しくないですか?

**上田** だからこそ自分だけでは出会えないものと出会えるインフラに、そして新しい出会いをデザインする場に学校がなれたら素敵だなと思います。

**古屋** おっしゃる通りで日本の先生の最大の専門性の一つにファシリテーション力があると考えています。知識の伝達自体は、AI時代、学校でなくても代替できる余地はありますが、生徒の個性やバックグラウンドを熟知したうえで、それぞれにあった学びや体験をデザイン

ンできる専門家はそうはいません。

**上田** 私も教師は媒介者であるべきだと考えています。世の中には教科書以外にも素晴らしい教材がたくさんあります。それらを、的確なタイミングで投げかけ、時に学校外の人をつなげながら生徒の可能性を広げていく。ただ、教師は仕事量が多いのも事実で、誰かしらの何かしらの我慢の上に成り立っている現状があるんです。

**古屋** 先生ならではの責任感や真面目さを時にはリセットし、無理なものは無理と言える力や、援助希求できる力が教師のスキルセット

意見が  
違う人たちが集う箱。  
そんな学校の価値を  
再認識した



Sachiko Ueda

※エコーチェンバー（反響室）とは、SNSなど同じ趣味や思想をもつ人が集まるコミュニティで自分と似た意見を見聞きし続けることで、世の中一般においても同じだと信じ込む現象。



に加わるといいですね。キャリア自律という言葉がありますが、プロになればなるほど個人でがんばる必要などなく、他人に頼っていいんです。キャリア教育の一次的な目標として頼れる存在を見つけることも大切だと思います。

——外部だけではなく、学校内のリソースを「機会」として有効活用することに関してはどうでしょうか？

**古屋** 自分がいる場所とは社会的文化的に違う環境に身を置くことで学ぶ越境学習(27ページ)という概念がありますが、「違い」は

組織の外側だけにあるのではなく、日常空間にも存在します。青山学院大学の香川秀太教授はそれを「日常の越境場」と呼んでおり、学校内部に潜む自分の外側の世界を顕在化できれば、キャリアを考える豊かな機会になると感じます。

**上田** 私は国語や探究の授業で「pitchトーク」というグループ学習を行っていました。ピッチとは短時間で相手の心を動かすスピーチのこと。まずグループ内で90秒ずつ、あるテーマでスピーチしてもらいます。その後グループの代表を決め、全体で発表する。例えば「どんな社会課題に義憤を感じるか」というテーマであれば40人分の社会課題に触れることができ、「あいつ、こんなこと思っていたんだ」とか「自分は人と違うことを感じるらしい」と気づき、自己認識が深まります。学校とは、意見が違う人たちが集う箱のようなもの。他者と交わることで生じる学びの価値を再認識できました。

**古屋** 素晴らしい取組ですね。「違いからしか学べない」と言った先人がいますが、私は学びのキーワードとして「共感と違和感」を挙げています。共感がないと「自分には関係ないこと」と流しがちですが、違和感がなければ、「わかるー」で終わってしまう。そう考えたとき、学校はその両方を装着した場所ではないかと思います。高校のクラスって似た属性の人間が集まるため、共感が生まれやすい。一方で上田さんが授業で可視化

「共感」と「違和感」。  
二つが揃って  
学びは広がる



Syouto Furuya



しているように、実は生徒一人ひとり違う考えを有しているため、違和感が生じることもある。学びが生まれる可能性が高い空間だと改めて感じました。

**上田** 学校は授業が命。主体的・対話的で深い学びが実現できれば、特別なイベントをせずとも意義のあるキャリア教育は実現できると思っています。「他者」と出会う機会例えば、クラスメイトとの対話もそうですが、教科書や教材自体にも出会いはあると感じています。以前、国語の授業で辞書を使用していたのですが、3年間、真っさらな辞書のままという生徒が大勢いました。どうにかしたいと考えた結果、「この子たちにとって調べるツールとしての辞書は不要でも、言葉と出会うツールにはなるのでは」と思いました、辞書の中から気になる言葉を選んでもらうワードハントという取組をしていました。

**古屋** ページをめくると、これまで知らなかった言葉との出会いがあるわけですから、まさに偶発性ですよ。

**上田** そうなんです。そして素敵だと思えた言葉を皆でシェアしたことで、オリジナルの「素敵な言葉の辞書」が完成しました。結果、語彙力や表現力を高められましたし、言葉を調べるためのツールという、辞書本来の使われ方をされるようになったんです。さらに、自分が素敵と感じた言葉の共通項から、自身の興味関心に気づき、進路選択へとつな

げていった生徒もいたり、逆に生徒が素敵と感じた言葉の共通項から、教師である私とその生徒の特性に気づき、キャリア支援の際の参考になったり、といったことも。教科教育の中でのキャリア教育的側面を感じた経験でもあります。

——ありがとうございます。最後に教師のあり方についてお聞かせください。

**古屋** 失敗や悩みも含め、生の言葉を伝える機会をつくってほしいです。高校生のロールモデルになり得るのは、自ら新しいことに挑戦し続けている先生ではないでしょうか。試行錯誤しながら自身のキャリアを豊かにしていこうと行動している姿が、卒業後、多くの機会と選択を重ねていく必要がある高校生に勇気を与えるでしょう。

**上田** 私も自分に向き合った結果として出てくる言葉を教師自身がアウトプットすることが大切だと思います。外に発信すれば、それを受け止めてくれる人も大勢生まれます。教師同士、学校同士がつながり、実践を共有し合うことができれば、そして「自分でなんとかしなきゃ」という“我慢”を手放し、社会に対して「助けて」と言えるようになれば、学校の力は何倍にもなるのではないのでしょうか。教師って子どもたちの未来を創る仕事に人生を懸ける選択をした人たちです。これほどパワフルでイノベーティブな集団はいないと思っています。

CASE

1

和光国際高校(埼玉・県立)  
新井晋太郎先生

CASE

2

出水商業高校(鹿児島・出水市立)  
山下優香先生

CASE

3

若狭高校(福井・県立)  
小坂康之先生

CASE

4

唐津西高校(佐賀・県立)  
中西美香先生

# 生徒の開かれた キャリアのために、 先生ができること

入学と卒業で常に生徒が入れ替わる学校で、思いもよらない出会いも経験し、  
どう受けとめるか思案もしているであろう先生方。その体験があるからこそ、  
生徒の機会と選択についてサポートできることがあるのかもしれない。

4人の先生方の取組をご紹介します。





CASE

1

# 挑戦して承認もされる機会をつくり 自ら道を拓こうとする姿勢を育む

和光国際高校(埼玉・県立) 新井晋太郎先生

取材・文／松井大助 撮影／澤崎信孝



## 挫折や回り道もある人生で やりたいことに向かうには

「チャレンジすること」と「自分を信じてがんばり抜くこと」。生徒たちがそんな経験をできる機会を増やしたい。和光国際高校の新井晋太郎先生はそう思っているという。

「チャレンジして、仮に失敗しても、そこから学ぶことができますし、失敗が悪いことだとは思っていないんです。また、人生には『どうがんばってもできないことがある』ものですが、それでも自分を信

### 生徒の機会と選択のために / 大切にしている3箇条

#### 1 生徒たち自身による 企画や運営の機会を

大小さまざまな教育活動のなかに、一部でもよいので、生徒たち自身で企画や運営にチャレンジする機会を設ける

#### 2 生徒の挑戦を発信し 本人や周囲を刺激

生徒の挑戦を記録し、ネットや校内で発信。がんばりが承認されるようにしつつ、その情報で他の生徒の挑戦も促す

#### 3 1対1の時こそ 生徒の変化に着目

距離があっても変化を察知しづらい生徒でも、その成長に気づき、承認していけるよう、1対1の時間を大切に

あらい・しんたろう●大学卒業後、食品メーカーに入社。3年目に退職し、塾講師、私立高校教員、東京都立中学校教員を経て、埼玉県公立高校教員に。高校1校目となる工業高校の定時制では、民間企業やNPOなどの外部と連携し、職業人との交流をはじめとするキャリア教育を推進した。2023年より現職。





じていろいろなことに挑み、がんばっていくと、道が拓けて、やりたいことにたどり着けるようにも思うのです。そう思うのは、僕自身が挫折や回り道をたくさんしてきたからかもしれません」

教員になりたいと思って大学に進学したが、当時は教員採用がほとんどない氷河期。途中で諦め、教職課程を取るのもやめた。卒業後、食品メーカーに就職。だがモチベーションが続かず「この世界では通用しない自分」を味わった。3年目で退職、塾の講師に。その時に「人に教えるのが好きだ」と確信し、大学に通い直して教員免許を取り、私立高校の非正規教員になった。ところが3年で契約を打ち切られる。それでもめげずに、東京都の教員採用選考を受け、合格して中学校に配属された。3年間働いたのち、心惹かれていた高校勤務をするために埼玉県の教員採用選考を受け、現在に至る。

「自分の経験を通して思ったんです。生徒が勉強して良い学歴や経歴を手にもすることに一定の意味はあるけれど、それ以上に大事なことは、学校生活全般で『挑戦することで自分や社会を知る』『粘り強くがんばる』といった姿勢を培うことなのでは、と。そうした姿勢は、どこの世界でも普遍的に通用するでしょうから」

だから新井先生は、生徒が自分たちで企画や運営にチャレンジするような場を生み出そうとしてきた。

前任校では、定時制の生徒たちに今まで参加していなかった文化祭への出店を呼びかけ、皆でやり抜くなかで自信をつけていく姿を見守った。

現任校では、国際教育部の担当として、留学生の受け入れや、生徒の海外研修の際に、相手

国との交流の一環となる「歓迎会」「お別れ会」の企画運営を生徒に委ねてきた。また、バレーボール部の顧問として、近隣の中学校のチームを招待する大会を開催。大会運営を生徒たちに任せ、生徒たちがフランス語、スペイン語、中国語で挨拶する場も設けた。

「進学校の生徒の日常は、教科学習が中心で、文化祭や体育祭など一部の行事をのぞけば、ほかの活動は『時間をかけられない』と教員のほうで企画や運営を進めがちです。ですが、生徒たちは中学校までにいろいろな出し物や式典をやっているから、できることは任せると、結構、生き生きと動いてくれるんです。そうして自分たちで何かを成した経験が、この先も自分で道を拓けるという自信に繋がるように思います」

## 変化に気づくことで 成長を後押ししたい

生徒たちのチャレンジやがんばりを発信することも力を入れている。

例えば、和光国際高校の海外研修では、希望した生徒がイギリスなどに2週間ホームステイする。新井先生は「普段とは異なる地でサバイバルする」またとない挑戦の機会と思っているので、事前の説明会から力を入れ、個別にも声をかけるそう。そのうえで、研修中は生徒の様子を写真や動画に撮り、学校のホームページやSNSにアップしている。

「自分の挑んだことが記録に残り、保護者やほかの人にも見てもらえると、喜んでやる気が増す生徒も多いんです。保護者の方も楽しみにしてくださっていて。そうした発信を通して、まだ踏み出せ



ないでいる生徒たちに、挑戦することの魅力をアピールすることもねらっています」

新井先生自身が、がんばっている生徒一人ひとりの「変化に気づく」ことができるようにも努めている。

「Acknowledgement (承認)に関する本を読んだのがきっかけでした。会社員時代にもがいていた自分を思い返しても、承認されることって大事だと思ったのです。定時制高校の生徒たちとの出会いも大きかったですね。自己肯定感が下がっていた子が多かったのですが、クサイ言い方かもしれませんが、愛情をもって個々の成長に目を向けていくと、生徒たちがどんどん変わっていったんです」

変化に気づくために重視しているのが、担任としての二者面談だ。新井先生は毎学期、面談を行っている。

「面談の機会がないと、『普段から寄ってきてくれる生徒』の変化にばかりよく気づくような偏重が生まれかねません。集団の中にいる時と、1対1の時では、教員に見せる顔が変わる生徒もいますよね。

本校には、勉強も部活動もがんばっている、いわば手のかからない生徒がかなりいます。ですが、高校生って、僕もそうでしたが、みんな不安を抱えていると思うんです。何のために勉強しているのか、何を目標せばいいのか、わからなくなったり。そうした悩みを聞き出し、いろいろなことに挑戦しようと背中も押しながら、個々の成長を見守りたいと思っています」

ちなみに、かくいう新井先生も、「教員の仕事に慣れてきた今、ここから自分が何を目標せばいいのか、実はすごく悩んでいる」のだそう。

「でも人生はそういうものかな、ずっと悩み続けるのかな、とも思います。だから今の目標は、自分にできることを日々一生懸命やることです」

## 新井先生の「現在地」

## 多様な出会いと別れのなかで生徒のチャレンジを促す



際高校ならではの校務分掌、国際教育部に所属する新井先生。イギリスやオーストラリアの海外研修や、シンガポールの修学旅行の内容を、海外派遣プログラム作成経験のある同僚と考え、現地の学習にも同行している。

それらの活動では各国の人との交流も重視。前任校でも定時制の生徒たちと職業人の交流の場を設けており、生徒に多様な出会いをもたらすように努めている。

現任校では、その出会いのなかで、生徒が出し物の企画などにも挑戦。イギリスの海外研修では、生徒発案で、ソーラン節やダンス、クイズや弾き語り、生け花や書道、英語歌唱などを現地の人と楽しんだ。その主体的な交流のなかで、生徒の視野が広がることを、新井先生は期待している。



イギリス研修の現地での交流。ホームステイし、自分たちで考えた出し物も披露して濃密に関わるので、帰国の際は別れを惜しんで泣き出す生徒もいるという。





# 社会の大人も、生徒も、対等に繋げる。 繋がりが生徒たちの思考を自由にさせる

出水商業高校(鹿児島・出水市立) 山下優香先生

取材・文／長島佳子 撮影／甘浦麻結



## キャリアコンサルタントの 資格取得で広がった視野

「生徒は仲間」と語る山下優香先生。その思いに至ったのは、正規教員として初めて赴任した農業高校でのこと。先輩教員たちからはいつも怒られ、ある生徒とは校則についてぶつかり、何もかもがうまくいかなかった。でも自分に元気がないと、代わりに授業を進めてくれる生徒がいたり、担任のクラスの生徒たちが守ってくれることが多々あった。

「自分にできるのは、仲間であってほしい生徒たちに寄り添うことだと思ったのです」

### 生徒の機会と選択のために / 大切にしている3箇条

#### 1 生徒も保護者もみんな仲間。 一緒に考えて支え合う

生徒、保護者、まちの人、管理職など、誰とでも上下関係ではなく対等な立場で考えて支え合うほうがずっと納得解が得られやすいと知った。

#### 2 多様な人と繋がることで生徒が 「本音やワクワク」を見つけられる

自分自身が校外の講習などでさまざまな出会いで一気に視野が広がり、それを生徒にも経験してほしいと、多様な人と生徒を繋げている。

#### 3 価値は時代によって変化する。 考えは変わってもいい

今の正しさが将来も正しいとは限らない。考えは変わってもいいし、就職後に何かあったら辞めてもいいと生徒に言うようになった。

やました・ゆうか ●鹿児島県奄美大島出身。小中高と先生に恵まれ教員を目指す。特に、生徒一人ひとりの良いところを見つけ、まちの人にも信頼されていた小学校時代の担任がロールモデル。長崎大学卒業後、奄美高校、大島北高校、鹿屋農業高校、出水工業高校を経て2024年より現職。2019年にキャリアコンサルタントの資格取得。





例えば、進路選択では生徒の夢は最後まで応援しようと決めた。他の先生は無理だろうと言う夢でも、本人と何度も語り合い、本音を引き出し、生徒自身がやるだけやっと思えるところまで挑戦を応援する。その結果、たとえ希望の進路は叶わなくても、本人は納得して別の道を進むことができる。

「教員の仕事は生徒の夢を諦めさせることではなく、夢に向かって最善を尽くす後押しをすることだと確信しました」

しかし、次の赴任先の工業高校で山下先生は担任を希望するが「無理だ」と言われてしまう。多くの生徒が進路で就職を選択する工業高校において、就職先の企業についての知識や繋がりが無い教員は、担任をもちにくかったのだ。

「寄り添いは土台。もっと専門的に生徒の人生を応援できる力をつけたい。そのときに知ったのがキャリアコンサルタントという資格でした」

資格取得のために半年間通った講習の場で、企業の人事担当者、ハローワークに勤める人、コンビニの店長など、さまざまな職種の人々との出会いがあった。それまでネガティブに受け止めていた転職も、海外ではキャリアアップに繋がることや、自分が万能でなくても足りない部分は人の力を借りればよいことなど、一気に視野が広がっていった。

「自分が知らない職種を生徒が希望すると、つい『大変だよ』と言ってしまいがちですが、その職種の人を知っていたり知識があれば、生徒に現場の声を提供できます。また、生徒たちに『何かあったら会社を辞めてもいいんだよ』と言えるようになりました。高卒で入った会社が一生の仕事になるかはわからない時代。それもキャリアコンサルタントの仲間を通して知り得たことです。私自身が多様な人と出会う

機会の大切さを実感できた経験でした」

それからの山下先生は、学校外の人々との繋がりをつくり、それを生徒たちに繋げる取組を次々と実践していく。例えば、出水市主催のリノベーションスクールの通知があった。市内の空き店舗などの遊休不動産を対象にエリア再生のためのビジネスプランを考えるスクールだ。当時、学校の授業が簡単すぎると、いつも寝ていた生徒がいたため、その生徒を誘ってみると興味を示したので二人で参加。ほとんどが社会人で高校生はその生徒だけだったが、とてもいきいきと取り組み、大人の中でも堂々と自分の意見を語っていた。

「まちや社会の大人と繋げることで、生徒が自分の本音に気づきワクワクを見つけられるとわかったのです。私自身もスクールで新たな繋がりができ、講師を学校に呼ぶなど、繋がりが繋がりを呼ぶ循環が生まれました。私の出身地の奄美大島のことわざ『水や山うかげ、人や世間うかげ（水は山のおかげ、人は世間のおかげ）』のように、人からしてもらったことは誰かに返し、温かな想いを循環させたいと思っています」

## 高校時代は選択の練習期間 今の選択が変わってもいい

まちと繋がることで、「高校生と関わりたい」「出水にいる生徒たちを応援したい」というまちの人々の想いを山下先生は肌で感じた。まちの人と生徒を繋ぎ、その想いとその方々の専門性を循環させるために、山下先生が外部の人を学校に呼んでくると、管理職の先生方も喜んで応援してくれた。

招いた講師には全校生徒を対象に講演をしてもらうこともあれば、山下先生の家庭科の授業で



ワークショップをしてもらうこともある。さらに、地元  
の企業の人々と共に、放課後に生徒を集めてワー  
クショップを行う部活外活動「SAN<sup>がく</sup>楽LABO」(本  
ページ下部のコラム参照)も実施。多様な形式で  
繋がりを広げている。

幅広い活動を通して山下先生が意識している  
のは、生徒とは上下関係ではなく対等に接するこ  
とだ。

「生徒は仲間です。今は高校生ですが卒業すれば  
すぐ社会人になる人たち。卒業生になればまた一  
緒に、次世代の生徒のための取組ができるかもし  
れませんが、もともと生徒たちは、私が『教える』ことを  
しなくても、機会さえ与えれば自分たちでやりたいこ  
とに気づき、実現する力をもっているのです」

それでも答えを欲する生徒もいる。そのときは、  
「今価値があると思っている答えが未来には変わ  
っているかもしれない。だから、今決めた答えが変  
わってもいい」と伝えている。

「変わってもいいと言われても生徒はモヤモヤし  
ています(笑)。でも、変化していく世の中で生徒た

ちは自分の人生を創っていかねばなりません。  
だから、『高校生はたくさんの中から選ぶ練習をし  
ているんだよ』と言っています」

多様な大人と繋がりをもち、自身での気づきを  
促されると、生徒たちの思考や物事の捉え方が自  
由になっていくと山下先生は感じている。

ただし、生徒自身が自由な思考になり、自分の好  
きなことを見つけられたとしても、進路選択において  
は保護者の応援がカギとなる。教員が関われるの  
はわずか3年間。卒業後も生徒にずっと寄り添い  
続ける保護者と生徒自身の想いのすり合わせも、  
山下先生が大切にしていることだ。三者面談は生  
徒と保護者の想いを重ねられるよう、「保護者の次  
に、2番目に生徒のことを思っている人でありたい」  
と伝え、本音を言い合える環境づくりに徹する。最  
終的には保護者から生徒に「がんばりなさい。これ  
からも応援している」という言葉が出てくるという。

「生徒にも保護者に対してもそれぞれ敬意を払  
い、一人の人として対等に関わり、共に考えること  
が、教員にできることだと思っています」

山下先生の「現在地」

## 学校の外で有志が参加する部活外活動「SAN<sup>がく</sup>楽LABO」

学

校の近隣にある企業と連携して、放課後に自由に生徒が集ま  
って地域の大人と交流する場「SAN<sup>がく</sup>楽LABO」。きっかけは、  
「小学校時代の学童のように、放課後に気軽に寄れる居場  
所が欲しい」というある生徒の声。その声に応え、地域の人々と山下先生  
が連携して2024年6月に発足。メンバー企業が日替わりで場所を提供し  
高校生たちは自由参加。そこにいる大人と会話したり、大人たちの知見を  
いかしたワークショップなどのイベントを開催したりしている。出水市の高校  
生なら誰でも参加できる。取材した当日も、ある生徒が「家に休眠焔があ  
り、祖母がなんとかしたいと言っている」と話すと、山下先生がすかさず「面  
白そう!何かできないかな?」と声をかけ、さまざまなイベントのアイデアが生  
徒たちから繰り出されていた。



「SAN<sup>がく</sup>楽LABO」ではまちの人、高校生がフラットな関係  
のなか、対話しながら共にやりたいことの意見を出し合っ  
て運営している。





CASE

3

# 生徒の心が動いた瞬間を見逃さず 思考を深める対話を繰り返していく

若狭高校(福井・県立) 小坂康之先生

取材・文／長島佳子



## 生徒の言葉に揺さぶられ 対話によって心を引き出す

宇宙飛行士の野口聡一さんが、高校生が開発製造したサバの缶詰を食べる様子を宇宙から動画配信。そのニュースが舞い込んだのは2020年のこと。宇宙日本食となった「サバ醤油味付け缶詰」を作ったのは若狭高校の生徒たち。初代の生徒たちが取組を始めてから14年が経っていた。その間、生徒と共に歩んできたのが小坂康之先生だ。

小坂先生は元々、2013年に統廃合され、現在の若狭高校の海洋科学科として生まれ変わった

### 生徒の機会と選択のために / 大切にしている3箇条

#### 1 生徒の人生を邪魔しない。 アドバイスは余計なお世話

「資格を取れ」、「進学した方がいい」などの先回りした助言は、良かれと思えども余計なお世話。生徒自身の声に耳を傾け引き出したい。

#### 2 生徒の人生にちょっとだけ お邪魔させてもらう

生徒たちが何かにワクワクと心が動いた瞬間に共感して、一緒に心から楽しむ。生徒の発言に自身が揺さぶられることも多々ある。

#### 3 どんな生徒も大人も、今より 良く生きたいことを心に置く

素行が悪く見える生徒であっても、人は誰でも今より良く生きたい、良い方向に向かいたいと思っていることを心に置いて向き合っていく。

こさか・やすゆき ● 東京水産大学卒業後、水産高校教員を目指し小浜水産高校に初任。地域と連携した海の再生活動や地域食材を利用した商品開発などを指導。2007年から宇宙サバ缶の開発に携わる。2013年、統廃合により若狭高校海洋科学科に転任。福井大学教職大学院、福井県立大学大学院生物資源学研究科修了。博士(生物資源学)。





小浜水産高校の教員だった。サバ缶製造実習は小浜水産高校開校時から続く伝統だったが、より高品質な製品を目指し2006年に国際的な食品衛生基準であるHACCPの取得を進めた。HACCPはNASA(アメリカ航空宇宙局)が宇宙食の開発のために基準を作成した起源があり、そのことを小坂先生が授業で伝えたとき、ある生徒が発した言葉がすべての始まりだった。

「それなら、わたらのサバ缶も、宇宙に飛ばせるんちゃう?」

普通の大人なら、生徒たちの荒唐無稽な夢と受け止めていたかもしれない。しかし、目を輝かせていた生徒たちの本気のワクワクに、小坂先生自身が揺さぶられ共感したのだ。そこから学校の統廃合を経て14年間の宇宙サバ缶開発が始まり、現在も引き継がれている。

生徒の気持ちに本気で寄り添い、夢を実現させることができたのは「対話」にあると小坂先生は語る。対話の重要性に先生が気づいたきっかけとなったのが、教員1年目の苦い経験だった。

「生徒たちから『授業がつまらない。先生たちの授業は中学の先生より下手』と言われたのです」

授業をろくに聞いてくれないのは生徒たちのせいではなく自分の実力不足だったと痛感。それ以来プリントを工夫したり、体験的な授業を増やしたりすると、寝ていた生徒の8割は起きるようになった。しかし、まだ寝ていた生徒を起こすと怒って教室から出て行ってしまった。すると、リーダー的な存在の

生徒が「先生は悪くない。追いかけてなくてもいい」と言ってくれた。彼の一言で他の寝ていた生徒も起きて、授業が楽しいと言ってくれるようになった。生徒たちの変化に小坂先生は、彼らは伸びたい、正しい方向に教員と歩みたいのだと強烈に感じた。

「それまでの自分はしゃべる一方で、生徒の声に耳を傾けていなかった。彼らの声に耳を傾け、対話することで一人ひとりと向き合えるようになりました」


生徒との対話は、何が好きで、何に価値を感じ、何を心地よいと思うか、もともと生徒たちがもっているものを引き出すためだ。さらに深めるためには「なぜそう思う?」「どこに価値を感じる?」「その気持ちを具体的に言える?」という問いをかけている。

## 探究のプロセスに対話を組み込むことで深みが増す

こうした対話を、小坂先生は現在も探究の時間で実践し続けている。

「探究は一人でやると思考が固定化して深まりにくいのです。他者の言葉や他者に向けて発することによって新しいことが見えてくるが多々あります。本校ではグループだけでなく一人での探究も認めていますが、プロセスの中で他者との対話の時間も組み込んでいます」

対話は発話でなくても、文章でもかまわない。日頃口数の少ない生徒が書いたものに対し、「こんなに深くて面白いことを考えていたんだ!」と他の生徒がゾクゾクしている様子も頻繁に見られる。対話の相手は生徒や先生以外の外部の人でもよいし、さらには人でなくても、物でも自然でも生徒の心に火をともしせるものは無数にある。それも含めての対話なのだ。



2007年のプロジェクト発足から14年かけて、先輩から後輩へと想いが引き継がれて完成した宇宙サバ缶。

そして他者とのヨコの対話だけでなく、自分自身の中で深めていくタテの対話も重要だと小坂先生は考えている。

「他者との対話を踏まえて、生徒一人ひとりの心や頭の中で起きている変化を見逃さない見取りの力と共に、探究を楽しむ姿勢が教員に求められています」

## 対話で育った卒業生が見取りが上手な教員に

若狭高校は10年以上前から探究に力を入れてきたが、高校での探究が大学の研究のように専門的になりすぎることには懸念がある。統廃合の際、若狭高校の海洋科学科となる旧小浜水産高校のあり方についての目標設定を、ステークホルダーとなる地域の漁師や企業、大学の教員と共に検討した。期待されていることについて、先生たちは水産に関する最新の知識や技術の習得と考えていたが、ステークホルダーたちからは「興味や関心、思考力や協働性を育ててほしい」と言われた。地

域から求められているのは資質・能力だったのだ。

「地域の方々との対話で、『何のために学ぶのか』を突き詰めたときに、ある漁師の方が『幸せになるためだろう』とおっしゃった。今、教育振興基本計画などでも謳われているウェルビーイングと一致していて、この言葉にも揺さぶられましたね。探究が始まったとき『時代を生き抜いていくために』という目的がありましたが、社会や時代に適応するためだけに生徒を育成しているわけではなく、一番の目標は生徒たちが幸せになるため。だから探究であまり無理はしなくていいと思います」

探究学習を経験した卒業生たちが、一旦は地元を離れて進学し、教員となって若狭に戻ってきている例が増えていると小坂先生は嬉しそうに語った。

「先日、うちの生徒と近隣の小学校に出張授業に行ったのですが、その学校に新任の先生がいて、生徒の見取りが実にうまい。『若いのにすごいですね』と感心して教頭先生に伝えたら『小坂先生の教え子でしょう』と。大人になっていたのが気づかずびっくりして。自画自賛してしまいました(笑)」

小坂先生の「現在地」

## 探究が教科授業の改善に繋がり進路との接続が明確になった

小

坂先生は、昨年度まで進路部長を担当(今年度はSSH 研究部長)し、その間、国公立大学への進路実績が向上した。偏差値だけではなく、生徒たちが学問領域で進学先を選択するようになってきた。これは探究を、自分のやりたいことを見つけ生き方を知る「自分の動詞探し」と位置づけた効果だと小坂先生は考えている。また、探究によって教員の、生徒一人ひとりを丹念に見取り、生徒の思考を深める問いを発する力が育ってきた。これは生徒支援、キャリア支援だけでなく、教科授業の改善にも繋がる。探究への真剣な取組が、教員の授業力と進学実績の向上に繋がったのだ。

「授業が面白くないと生徒たちの成績は上がりません。教員の授業磨きになる探究は全校教員で取り組まなければもったいないです」



探究の授業は1クラスを複数の教員が担当。あくまで生徒主体のため、先生たちは生徒の様子を見守り、生徒の心に火がついた瞬間を見逃さないように努めている。





CASE

4

# 日常の活動にひそむチャンスから 外の世界にあるチャンスまでつかめるように

唐津西高校(佐賀・県立) 中西美香先生

取材・文／松井大助 写真／諸石 信



## 目の前に転がっている チャンスを見出すには

唐津西高校で教頭を務める中西美香先生は、生徒によく「3C」の話をする。「チャンスがあればチャレンジして。それが自分のチェンジ、変わるきっかけになるから」と。

ただ、「チャンスは転がっていても意外と気づかない」とも思っている。今やっていることの中にひそんでいるのに見過ごしたり、一歩踏み出さないと出会えなかったり。だから生徒には「アンテナを高く張ってチャンスをつかんでほしい」という。

ではそのアンテナが高まるよう、教員にできるこ

### 生徒の機会と選択のために / 大切にしている3箇条

#### 1 内発的動機が生まれるよう やるべき課題をアレンジ

目の前の生徒たちの興味・関心(または今の学校の組織文化)に合わせて、学校でやるべき課題を調整し、本人たちのやりたいことに繋がるように促す。

#### 2 内発的動機が生まれるよう チーム構成を工夫

生徒同士や教員同士でチームを組む時は、目的に応じて異質または同質の集団にしたりと構成を工夫し、個々が主体性を発揮しやすい環境にする。

#### 3 外と繋がることを応援し 選択や判断は本人に委ねる

生徒や同僚の先生に、外と繋がる機会を届け、以降の選択は本人に委ね、外部との関わりのなかで視野を広げたり、自身の強みを発見したりしてもらう。

なかにし・みか●写真中央。大学卒業後、佐賀県の数学科教員に。2018年に佐賀大学大学院学校教育学研究所(教職大学院)を修了、主幹教諭時代に同大客員准教授も3年間兼任した。現任校では教頭として普通科改革を推進、教育活動の柱に据えた探究活動にも注力。写真は、探究支援部の山口崇先生(左)と、末松真樹先生(右)と共に。





とはあるのだろうか。

中西先生は「外発的に始まるものを、どう内発的なものにもっていくか」を考えてきた。授業などで教員が計画した形で始まったことでも「自らやりたくなり、自分の可能性が広がるもの」を発見できるチャンスがある。生徒がそう思えるように。

数学の教員として取り組んだのは、学習課題を生徒にとって身近なものにアレンジすることだ。商業高校では、部活動が盛んでスポーツへの関心が高いことに着目。教科書にある気温のデータではなく、生徒たちのスポーツテストの結果を基にデータ分析の授業を行った。すると「サッカー部と野球部、どの種目でどちらの運動能力が高いか」など、競技特性と各種目の相性を推しはかる自発的探究が始まり、最終的には校外の大会で成果発表する活動へと化した。

グループの活動では、与えた課題を、生徒が自分ごとにしていけるようにチーム構成も工夫する。

「互いの考えが広がるようにしたいなら『異質の集団』に、特定テーマへの考えを深めたいなら『同質の集団』にあえてしたりします。同じ市町村に住む生徒同士でグループ分けし、統計データを基にした地域分析をしたこともあります。自分の住む地域だから興味をもって進められますし、別の地域に住む生徒たちの発表を聞くことで『ほかの地域とそんな違いがあるんだ』と当事者としての発見を楽しんでくれました」

## 知らない世界との邂逅が 未来の選択の幅を広げる

生徒が「外に出る・外と繋がる」ことも積極的に応援してきた。

「がんばっている生徒の興味・関心に合わせて『学

校外の活動やコンクール、プレゼン大会の募集があるけど、やってみる?』と声をかけるんです。無理強いはせず、やるかどうかの選択は生徒に委ねます」

生徒がやることを選んだら、発表や活動の準備をサポート。校外に出たら、あえて距離を取って見守る。「教員の目が行き届かないほうが、生徒は自分で考えて行動する」からだ。その外での挑戦が、仮に生徒目線で失敗に終わったとしても、「やってみて課題がわかったなら、それも収穫だよ」と背中を押してきた。

「知らない世界を知っていろいろな考えにふれると、生徒の視野が広がります。日常では接したことのない人と関わるなかで、生徒のもつ良さが引き出されることもあります。外に出ることで巡り合えるそうしたチャンスを体感してほしいのです」

こうした思いは、ボランティア部の顧問を長年務めるなかで培われたという。ボランティア部の生徒は、高齢者や幼児と接したり、大人と協働したりと、多様な人と関わる。そこで新たな一面を見せて成長することが多かったのだ。学校でよく注意される生徒が、幼い子と接した時に自然にしゃがんで目線を合わせたのを見て、胸打たれたこともあった。

中西先生自身が「外に出る」ことの魅力を感じてきたことも大きい。

40歳で農業高校の進路指導主事になり、リーマン・ショックの不況時、生徒の就職先を探して10社前後の企業を回った。企業人の知見にふれ、自らビジネス書を読みあさった。40代後半に、県下に新設される教職大学院の研修に面白そうだと飛び込んだ。学校組織や教育経営について研究し、小中学校の先生とも交わった。そうして外の世界にふれると「見える景色が変わり、未来の選択の幅が広がった」という。



## チャレンジや学びの機会が 教員にもたくさんある学校に

教職大学院修了後、中西先生は、生徒だけでなく、先生にも目を向け、組織運営に深く関わるようになった。見える景色が変化して選んだ道だ。

関心を寄せてきたのは、「外発的に始まる学校改善を、いかに内発的なものにするか」。取り組んだのは、国や県の方針として導入すべきものを「今いる学校の組織文化に合うようにアレンジして進める」ことだ。

主幹教諭を務めた工業高校では、コミュニティ・スクール導入を推進。教育方針を共に考える学校運営協議会のメンバーを、地元有識者などから選出した。その際は、地元の新聞1年分を見返して候補者をリストアップしつつ、校内の先生にも「繋がりのある人や繋がりを深めたい人」について1カ月近くヒアリングし、皆の意見を反映して組織化した。

その前の商業高校では、コロナ禍にオンライン教育推進プロジェクトを牽引。チーム構成では、IC

Tが得意で前向きな先生だけを集めるのではなく、苦手意識がある先生にも参加してもらい、異質な集団として多様な意見を出し合って、皆で挑戦できるやり方を模索した。

先生が「外と繋がる」ことも後押ししている。自身の人脈を生かして外部の人・団体に学校教育に協力してもらう時、中西先生は必ずほかの先生にも繋いできた。校務分掌や教科の専門性から、協力者と結びつきそうな先生を活動の立ち会いに誘うなどして。以降はその先生が自分の企画でも連携できるようにだ。

「入口は私個人の繋がりでも、『組織と組織の繋がり』にしていきたいのです。外と繋がることで先生方の視野も広がりますし、外部の多様な意見を基に、時代の変化に応じた学校運営を皆で考えるチャンスも生まれます。今の時代はジグソーパズル型でなく、組み立てブロック型だと言われたりしますよね。生徒のキャリアも、学校のあり方も、枠に当てはめるといより、自分たちで形から思い描き、柔軟に創造していくことができたらと思っています」

中西先生の「現在地」

## 探究活動を軸とする学校改革を組織全体に広げようと邁進

普

通科改革の一環で、探究活動を軸とするコース制を導入した唐津西高校。校務分掌に「探究支援部」を新設、そのメンバーを中心に企画運営を進めている。中西先生は教頭としてその取組をサポートし、また、組織全体に熱を広げられるように「学年と分掌という縦と横を意識して」個々に働きかけている。

探究支援部の企画で、多様な社会人を招いて生徒がテーマ発表した際は、学年団の希望を基に人集めで協力。22人も集まり、担当教員から「楽しになってきました」と言われ、それが嬉しかったという。

学校の異動や立場の変化で、やる事が変わる教員という仕事。今自分に求められていることは何かを考え、「置かれた場所で咲くことができれば」と中西先生は言う。



社会人を招いたテーマ発表。外部の協力者から同僚の先生まで、中西先生は関わった人から「気づいたら巻き込まれていた」とよく言われるそうだ。






## 編集後記

# もしかしたら、 この瞬間が、はじまりかもしれない。

今号では、日常の中にあるふとした瞬間を「機会」と捉え、その中から一歩だけでも何かへと踏み出してみる大切さについて特集いたしました。



皆さまはどのようなきっかけで、今の先生というお仕事に就かれたでしょうか。はじめから目指されていた方もいらっしゃるかもしれませんが、さまざまな縁や偶然が重なってという方もいらっしゃるかと思います。今回は、後者側のアプローチを中心にスポットライトを当てています。決して目標をもつことに対して否定的に考えているわけではなく、これからの時代においては「両利き」である重要性が増しているように感じています。漠然とした目標に思いを馳せつつ、目の前に起こることを機会と捉え、自分なりの意味づけをもって前に進めていく。そして、日々の気づきをまた目標側に還元していく。今号の取材を通して、変化が激しいと称される時代に、私たち自身も変化していくためのヒントをたくさん得られたように感じています。

これから進学・就職へと歩みを進めていく高校生たちを前に、学校現場ではなかなか伝えづらい概念も含まれているかもしれませんが、ふと「この瞬間」について、生徒さまと共に意味を深めていくご参考となりますと幸いです。

